

# 2 動詞(1)

○四段活用・上一段活用・下一段活用・上一二段活用・下一二段活用、それぞれの活用のパターンを覚えよう。



### 《ポイントA》

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
書く	書	か	き	く	く	け	け

※四段活用の活用のパターンは、「ア・イ・ウ・エ」である。  
 (「ア・イ・ウ・エ」の四段にわたって活用するので、四段活用という。)  
 未然形がア段の音となるのが特徴である。

### 《ポイントB》

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
着る	○	き	き	きる	きる	きれ	きよ

※上一段活用の活用のパターンは、「イ・イ・イ・イ」である。  
 (すべて「イ」の一段で活用しているので、上一段活用という。)

※この活用の種類に属する語は数が少ないので主なものは覚えてしまうこと。  
 「干る」「射る」「着る」「似る」「見る」「居る」「率る」など。

### 《ポイントC》

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
蹴る	○	け	け	ける	ける	けれ	けよ

※下一段活用の活用のパターンは、「エ・エ・エ」である。  
 (すべて「エ」の一段で活用しているので、下一段活用という。)

※この活用の種類の語は「蹴る」の一語だけである。

### 《ポイントD》

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
起く	起	き	き	く	くる	くれ	きよ

※上二段活用の活用のパターンは、「イ・イ・ウ・ウ」である。  
 (「イ・ウ」の二段にわたって活用するので、上二段活用という。)

※この活用の種類で、ヤ行に活用するものは、「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語しかない。

### 《ポイントE》

例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
受く	受	け	け	く	くる	くれ	けよ

※下二段活用の活用のパターンは、「エ・エ・ウ・ウ」である。  
 (「ウ・エ」の二段にわたって活用するので、下二段活用という。)

※この活用の種類で、「フ」行に活用するものは、「植う」「飢う」「据う」の三語しかない。  
 語幹のない「得」「寝」「終」の三語は、その活用形の読みが問われることがあるので、注意しよう。

④ 動詞とは、動作と存在を表す言葉で、多くはウ段の音で言い切る。文中では述語となりやすい。

### 【基本ドリル】

**A** 次の例文の空欄に、四段活用動詞「読む」を活用させて記入せよ。

① 古文を

時なり。

② 古文を

て、うれし。

**B** 次の例文の上二段活用動詞に傍線をつけよ。

- ① 弓射ること心得たる人あり。
- ② 人の娘を盗みて、武蔵野へ率てゆく。
- ③ 三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり。

**C** 次の各文には、「蹴る」が形を変えて用いられている。その中の古語としてふさわしくないものの番号を選べ。

- ① 鞠を蹴る人。
- ② 鞠を蹴らず。
- ③ 鞠を蹴る。

④ 鞠を蹴りたり。

**D** 次の口語(現代語)の動詞を文語(古語)の動詞の終止形に改めよ。

- ① 起きる
- ② 悔いる

②	①
<input type="text"/>	<input type="text"/>

**D II** 次の例文の空欄に適する平仮名一字を入れよ。

年老

たる翁。

**E I** 次の例文の空欄に動詞「受く」を活用させて記入せよ。

① 大学入試を

季節になりぬ。

② 大学入試を

む。

**E II** 次の傍線部の読みを記せ。

夜も更けぬ。はや、寝べし。

【練習ドリル】

1 次の和歌の傍線①～③の動詞を解答例に従って文法的に説明せよ。

春来ぬと人は言へどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ

(解答例) カ行四段活用連用形

③	②	①

2 次の動詞の活用表を作れ。

得	見る	出	消	
				語幹
				未然形
				連用形
				終止形
				連体形
				已然形
				命令形

植	閉	
う	づ	
		語幹
		未然形
		連用形
		終止形
		連体形
		已然形
		命令形

3 次の動詞は四段と下二段の両方に活用する。それぞれの未然形を答えよ。

① 立つ 四段 下二段

② 頼む 四段 下二段

4 次の傍線部は動詞の音便形である。そのもとの形を答えよ。

或は転んで落ち、或はうち折つて死ぬるもあり。

②	①

5 次の傍線部の動詞の、活用の行と種類および活用形を記せ。

- ① 世をば捨つれども、身をば捨てず。
- ② われと思はむ人々は、寄り合へ。
- ③ 四十過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなし。
- ④ ある人、弓射ることを習ふ。
- ⑤ 海の中に、はつかに山見えけり。

⑤	④	③	②	①	
					活用の行と種類
					活用形
					形
					形
					形
					形
					形

6 次の例文から、四段・上一段・上二段・下二段の動詞を書き出し、その活用の行・種類・活用形を答えよ。(解答欄の数は解答数と同じ)

- ① 日数のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。
- ② 力衰へて分を知らざれば、病を受く。

②	①	
		動詞
		行
		種類
		活用形
		形
		形
		形
		形

【基本ドリル】の解答

- A ① 読む ② 読み
- B ① 射る ② 率 ③ 居
- C ②・④
- D I ① 起く ② 悔ゆ
- D II い
- E I ① 受くる ② 受け
- E II ぬ

### 3 動詞(二)

#### 《ポイントA》

来	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	○	こ	き	く	くる	くれ	(こ)よ	こ

※力変動詞の基本は「来」一語だけだが、「まうで来」「持て来」など、複合語もある。  
 「来」の字は未然形・連用形・終止形・命令形の読み方が異なるので、つねに読み方に注意すること。

#### 《ポイントB》

す	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
○	せ	し	す	する	すれ	せよ		

※サ変動詞の基本は「す」「おはす」の二語である。  
 ※「奏す」「具す」など、「漢字一字を音で読むもの」+「す」は、サ変動詞。  
 「申」の音読みは「シン」である。  
 したがって、「申す」は「もうす」と読む(訓読み)ので、サ変動詞ではない。  
 ※「念す」「興す」など、サ行に活用するものも、サ変動詞である。

#### 《ポイントC》

死ぬ	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬね	

※ナ変動詞は、「死ぬ」「往ぬ(去ぬ)」の二語である。  
 ※六つの活用形がすべて異なる動詞である。  
 「死ぬ」はナ変動詞、「死す」はサ変動詞である。

#### 《ポイントD》

あり	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
あ	ら	り	り	る	れ	れ		

※ラ変動詞は、「あり」「居り」「侍り」「いますかり」の四語である。  
 ※終止形だけが四段活用と異なる活用をする。  
 「居り」はラ変動詞、「居る」は上一段活用の動詞である。

#### 《動詞の活用の種類の見分け方》

○力変・サ変・ナ変・ラ変・上二段・下二段の動詞は覚える。

○その他の動詞は、「ず」をつけ、未然形によって判別する。

\*「書かず」のように、ア段の音から「ず」につづくものは四段活用。

[例] 申す・思ふ・飲む・降る

\*「起きず」のように、イ段の音から「ず」につづくものは上二段活用。

[例] 過ぐ・落つ・恋ふ

\*「受けず」のように、エ段の音から「ず」につづくものは下二段活用。

[例] 逃ぐ・愛づ・耐ふ・枯る

○力変・サ変・ナ変・ラ変の活用を覚えよう。  
 ○それぞれに所属する語を覚えよう。

#### 【基本ドリル】

A 次の例文の力変動詞の読みを書け。

- ① 春、来たり。
- ② 春よ、来。
- ③ 春、来。
- ④ 春、来ず。

④	③	②	①

B I サ変動詞「す」を活用させて、空欄に記入せよ。

蹴鞠(けまり)を  てみると  ども、  
 ず。

B II 次のの中からサ変動詞を選べ。

- イ 隠す    ロ 念す    ハ 臥す  
 ニ 見す    ホ 具す

C I 次の例文からナ変動詞を抜き出し、その活用形も答えよ。

「水におぼれて、死なば死ぬ。」

ii	i
形	形

C II 次の例文の空欄に「往ぬ」を活用させて記入せよ。

前裁(せんさい)の中にかくれるて、河内へ   
 見れば、  
 顔にて

D 次の傍線部の活用形を答えよ。

- ① をかしき花ありてうれし。
- ② をかしき花ありと言ふ。
- ③ をかしき花あれと言ふ。
- ④ をかしき花あれども見ず。

④	③	②	①
形	形	形	形

〔練習ドリル〕

1 次の傍線部「来」(カ変)の読みを記せ。

- ① 舟に乗りて帰り来けり。
- ② 「いづら、猫は。こち率て来。」
- ③ 銭ももて来ず、おのれだに来ず。

①
②
③

2 次の例文の空欄に、サ変動詞「す」を活用させて記入せよ。

- ① われかの心地  て、死ぬべくおぼさる。
- ② もとより友と  人、一人二人して行きけり。
- ③ 夜昼待ち給ふに、年越ゆるまで音も  ず。

①
②
③

3 次にあげた動詞の、活用の種類をそれぞれ記せ。

- ① 

a	来 <small>く</small>
b	来 <small>きた</small>
- ② 

a	居 <small>ゐ</small>
b	居 <small>ゐ</small> り

①	動詞
	種類
	活用形

- ① 死なぬ薬を食はざれば、つひに死す。(二つ)
- ② よきに奏したまへ、啓したまへ。(二つ)
- ③ 「誰れ誰れかはべる」と問ふこそ、をかしけれ。(二つ)

③	a	①	a
b	死す	b	死ぬ
		④	②
b	死す	b	死ぬ

- ③ 

a	死ぬ
b	死す
- ④ 

a	す
b	なす

4 次の例文の変格活用の動詞を抜き出し、その種類と活用形を答えよ。  
(解答欄は解答数と同じ)

6 次の傍線部の、動詞の活用の種類と活用形またその終止形を答えよ。

うつくしきもの。瓜にかきたる児の顔。雀の子の、ねず鳴きするに  
をどり来る。二つ三つばかりなる児の、急ぎてはひ来る道に、いと小  
さき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへ  
て、大人などに見せたる、いとうつくし。頭は尻そぎなる児の、目に  
髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきてもなど見たるも、う  
つくし。

--

5 次の文中の傍線部は音便形である。それをもとの形に直して答えよ。

世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばや。

③	②	動詞
		種類
		活用形

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	活用の種類
							活用形
							終止形

〔基本ドリル〕の解答

- A ① き ② こ ③ く ④ こ
- B I (順に) し・すれ・せ
- B II ロ・ホ
- C I i 死な・未然 ii 死ね・命令
- C II 往ぬる
- D ① 連用 ② 終止 ③ 命令 ④ 已然

# 4 形容詞

○形容詞の二種類の活用を覚えよう。  
○語幹の用法を覚えよう。

## 《ポイントA》

形容詞は、ものの性質や状態を表す言葉で、「し」で言い切る品詞である。

活用種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	高し	高	(く)	かり	し	かる	けれ	かれ
シク活用	美し	美	(しく)	しかり	し	しきる	しけれ	しかれ

※ク活用とシク活用を見分けるには、動詞「なる」をつけてみる。

- ① 「高くなる」のように「しく」となるものは、ク活用。  
[例] 憂し・おほつかなし
  - ② 「美しくなる」のように「しく」となるものは、シク活用。  
[例] いやし・ゆかし
- ※「から・かり……」「しから・しかり……」というカリ系列・シカリ系列は、基本的には下に助動詞がつくときに用いる。  
[例] 美しかりけり

## 【基本ドリル】

- A I** 次の□の中の形容詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。
- ① ありがたし 御かたち人なり。
  - ② 慣らはぬ鄙の住まひこそ、思ふも悲し。
  - ③ うるはしき貝など多しけり。

②	①
③	

## A II 次の傍線部(形容詞)の活用形を答えよ。

- ① 法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。
- ② 初心の人、二つの矢を持つことなかれ。
- ③ 若くて失せにし、いといとほしくあたらし。

③	①
形	形
	②
	形

覚えておきたい形容詞の語幹の用法

- ※「形容詞の語幹 + 接尾語(み)」の形で、原因・理由「し」ので」を表す。  
「し(を)くみ」の形をとることが多く、「し」が「ので」と訳す。  
[例] 山を高め(山が高いので)

## 《ポイントB》

### 【練習ドリル】

#### 1 次の傍線部の形容詞の、活用の種類と活用形を記せ。

- ① なかなかにをかしき夜かな。
- ② 住吉の浜、いとおもしろければ、おりみつ行く。
- ③ いみじからん心地もせず。

③	②	①	
			活用の種類
			活用形
形	形	形	

#### 3 次の例文の傍線部は、形容詞の音便形である。それをもとの形にもどせ。

- 五月のつごもりに、雪いと白う降り。
- ありは、いとにくけれど、水の上などを、ただあゆみにあゆみありくこそをかしけれ。

ii	i	
		抜き出し
		終止形

#### 2 次の□の中の形容詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。

- ① うつくし こと限りなし。いと
- ② 幼し ば、籠に入れて養ひけり。

②	①

#### 5 次の例文の傍線部を現代語訳せよ。

空さむみ花にまがへてちる雪に少し春ある心地こそすれ

--

### 【基本ドリル】の解答

- A I** ① ありがたき ② 悲しけれ ③ 多かり
- A II** ① 未然 ② 命令 ③ 連用

# 5 形容動詞

○形容動詞の活用を覚えよう。

## 《ポイントA》

形容動詞は、ものの性質や状態を表し、「〜なり」や「〜たり」で言い切る品詞である。ナリ活用とタリ活用があるが、特にナリ活用が重要である。

活用の種類	例語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	静かなり	静か	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

※形容動詞は、次のようにしてできた語である。

「静か + に + あり」↓「静かなり」（ラ変型活用）

※連用形だけは、二つの形がある。「〜なり」は助動詞が下につくときに用いられ、それ以外は「〜に」が用いられる。

※「〜げなり」という形の形容動詞が多い。

〔例〕うつくし ↓ うつくしげなり

あはれ ↓ あはれげなり

※「いかに」「さらに」「ことに」は、形容動詞の連用形としないで、副詞とするのが普通である。

形容動詞の活用は分かりやすいので、文法的にはそれほど神経質にならなくてもよい。ただし、重要な意味の単語が多いので、語彙を増やすよう努力しよう。

## 〔練習ドリル〕

1 次の傍線部の形容動詞の活用形を答えよ。

① 優なる北の方の心なるべし。

② あからさまに抱きてうつくしむ程に、

③ 今更思ひ出でてあはれなりければ、

③	②	①
形	形	形

2 次の□の中の形容動詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。

① 木のさまは 憎げなり ど、あふちの花いとをかし。

② 夜は はなやかなり 装束、いとよし。

②	①

3 次の例文から形容動詞を三つ選び出し、その活用形を答えよ。

## 〔基本ドリル〕

A I 次の傍線部の形容動詞の活用形を答えよ。

① あはれにおほえて、いみじうかなしくてやしなふ。

② やはらかなる瓜一つ取りて、食はんとしける時、

①
形
②
形

A II 次の□の中の形容動詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。

① 身もくたびれ、心も 静かなり ず。

② 折節の移り変はるこそ、ものごと あはれなり。

③ 世の中はありがたく むつかしげなり ものかな。

③	②	①

おほち 大路のさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

4 次の□の中の形容動詞(終止形)を適当に活用させて、さらにその一文を現代語訳せよ。

みかどの使ひをば、いかで おろかなり せむ。

iii	ii	i	
			形容動詞
			活用形
形	形	形	

現代語訳

## 〔基本ドリル〕の解答

A I ① 連用 ② 連体

A II ① 静かなら ② あはれなれ ③ むつかしげなる

# 6 助動詞入門

## 《ポイントA》

助動詞は動詞・形容詞・形容動詞や他の助動詞などについて、その動作・状態が過去のことであるとか、打ち消すとかいった意味を加えるものである。

「花咲く(花が咲く)」に、助動詞を付けてみよう。

〔例〕花咲きけり(花が咲いた)。

〔例〕花咲かず(花が咲かない)。

## 《ポイントB》

助動詞は、その上にある語の活用形が決まっている。これを接続という。

〔例〕咲かず。↓「ず」は未然形接続

〔例〕咲きけり。↓「けり」は連用形接続

助動詞の接続は一つ一つ個別に覚えるよりもまとめて覚えてしまう方が楽である。まず、次のものを覚えよう。

- 未然形に接続 ↓ ず・る・らる・す・さす・む
- 連用形に接続 ↓ き・けり・つ・ぬ・たり
- 終止形(ラ変型)には連体形に接続 ↓ べし・なり(伝聞推定)
- 連体形・体言に接続 ↓ なり(断定)
- サ変の未然形・四段の已然形(命令形)に接続 ↓ り

## 《ポイントC》

助動詞も動詞などと同様に下につく語によって形が変わる。助動詞も活用するのだ。

〔例〕花咲かず(花が咲かない)。

〔例〕花咲かぬ時(花が咲かない時)。

※「ぬ」も打消の助動詞「ず」の活用したものである。

助動詞の活用の型は動詞や形容詞などの活用と同じ型のものが多い。

例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ変型
死ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ変型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ変型
死ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	ナ変型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
高し	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
べし	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
べし	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
高し	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
き	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
き	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
き	く	かり	し	き	けれ	し	活用型
例語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
き	く	かり	し	き	けれ	し	活用型

「べかれ」は本来は用いられないが、活用型を使って覚える時には入れておいた方がよい。「まじ」「まほし」も同様にして覚えよう。

単独で覚えなければならない特殊型のものもある。

○助動詞は、意味・接続・活用の三つを押さえなければならない。  
(巻末の「助動詞一覧表」を参照すること)

## 【基本ドリル】

A 次の例文を助動詞に注意しながら口語訳せよ。

- ① 鳥鳴きけり。
- ② 鳥鳴かず。

①	②
---	---

B I 次の例文の空欄に「舞ふ」を活用させて入れよ。

① 風	けり。
② 風	ず。

B II 次の助動詞の接続を答えよ。

- ① き
- ② り
- ③ む
- ④ けり
- ⑤ ぬ
- ⑥ べし
- ⑦ る
- ⑧ なり(断定)

①	②
---	---

C I 次の例文の空欄に打消の助動詞「ず」を活用させて入れよ。

⑦	⑤	③
⑧	⑥	④

① 月を見

。
---

② 月を見

人。
----

C II 次の各問に答えよ。

① 下一段型活用をする「る」の活用表を完成させよ。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形

② ラ変型活用をする「り」の活用表を完成させよ。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形



【練習ドリル】

1 次の例文の傍線部を助動詞に注意しながら口語訳せよ。

① 楽しみは三人の児どもこもすくすくと大きおになれる姿すがた見る時  
〔「る」は完了の助動詞「り」の連体形〕

② この人々の深き志は、この海にも劣おとらざるべし。

〔「ざる」は打消の助動詞「ず」の連体形  
「る」は推量の助動詞「べし」の終止形〕

②	①

2 次の傍線部の活用形を答えよ。

① 目の前よりはやき水流ながれたり。

② この花の咲く折は来きむ。

③ 和歌の船に乗るべし。

③	②	①
形	形	形

3 次の□の語をそれぞれ適する形に活用させよ（直下はすべて助動詞で終止形）。

① 五十いそぢの春を迎へて、家を出で世を□そむくり。

② 国守の□おはすなり。（「おはす」はサ変・「なり」は断定）

③ 大納言、南海の浜に□吹き寄すらる。

④ いみじく思し嘆くこと□ありべし。

⑤ ものの音は遠きまされり鳥かすすら遙かに聞けば□をかしけり

⑥ めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えむは、□口惜しべし。

⑥	⑤	④	③	②	①

4 次の□に下二段型の活用をする助動詞「つ」をそれぞれ適する形に活用させて入れよ。

① この僧の顔に似□む。

② 昨日なむ都にまうで来□。

③ 雀来ぬべしと申し□ど、来ず。

③	②	①

5 次の□の助動詞をそれぞれ適する形に活用させよ。

① 母ありしが失せ□ぬき。

② 舟出だすままに、風にぞ吹か□る。

③ 抜かむとするに大方抜か□るず。

④ 宣長のりなが、県居あがたの大人おとな（賀茂真淵）に会ひたてまつりしは、この里に一度宿り給へり□き折、一度のみなりき。

⑤ 作文さくぶんの船にぞ乗る□べしける。

【基本ドリル】の解答

A ① 鳥が鳴いた。

② 鳥が（は）鳴かない。

B I ① 舞ひ ② 舞は

B II ① 連用形

② サ変動詞の未然形・四段動詞の已然形（命令形）

③ 未然形 ④ 連用形 ⑤ 連用形

⑥ 終止形（ラ変型に活用する語には連体形）

⑦ 未然形 ⑧ 連体形（もしくは体言）

C I ① ず ② ぬ

C II ①

①	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
れ	れ	る	るる	るれ	れよ	れよ
②	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ら	り	り	る	れ	れ	れ



# 7 助動詞(一)「き」「けり」

○「き」の活用を確認する。  
 ○「き」と「けり」の意味の違いを理解する。  
 ○「けり」の二つの意味を見分けられるようにする。

### 《ポイントA》

「き」「けり」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
連用形	き	(せ)	○	き	し	しか	○	特殊型
連用形	けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○	ラ変型

※過去の助動詞「き」の連体形の「し」を、他の品詞と区別すること。

【例】都をなむ出でし。↓過去の助動詞「き」の連体形「なむ」の結びで連体形

【例】物語して過ぐす。↓サ変動詞「す」の連用形(接続助詞「て」の上で連用形)

【例】花をしも見ず。↓副助詞「し」を除いても文意が変わらない

※「けり」の已然形「けれ」を、他の品詞と区別すること。助動詞「けり」の場合その上が連用形になっている。

【例】花こそなかりけれ。↓過去の助動詞「けり」の已然形  
 【例】花こそなけれ。↓形容詞「なし」の已然形の一部

### 《ポイントB》

「き」「けり」の意味

過去(〜た) [直接経験の過去]	過去(〜た) [伝聞した過去]
「き」	「けり」
詠嘆(〜よ・〜なあ)	

※「けり」が詠嘆になるのは、言い切り(終止形・係り結びの結びの形)で

①和歌の中で使われているとき。

②筆者や話者の感想を表しているとき。(会話文中に多い)

### 【基本ドリル】

A I 次の□の助動詞を適する形に活用させよ。

- ① 小式部と呼ばれ □ 人あり。
- ② 人知れずこそ思ひ □ 。
- ③ しもと見るにぞ身は冷えに □ 。

③	②	①

A II 次の例文の傍線部のうち、助動詞「けり」の活用した方を答えよ。

- イ 花の散るこそうつくしけれ。
- ロ 鳴く虫の声こそめでたかりけれ。

--

B 次の例文の傍線部のうち、詠嘆の意を表す方を答えよ。

- イ 面影の霞める月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に
- ロ よろづのことに使ひけり。

--

### 【練習ドリル】

1 次の例文の過去の助動詞をそれぞれ抜き出せ。

- ① 雨のいと降りしかば、え参らずなりにき。(二二)
- ② 小大進と聞こえし歌詠みなり。(二二)

②	①

2 次の傍線部「し」のうち過去の助動詞「き」の活用したものはどれか、記号で答えよ。

- ① 秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。
- ② いとかなしくしけり。
- ③ そのままになむ居られにし。

--

4 次の傍線部の文法的意味として適当なものを、後の中からそれぞれ選べ。

- ① 身はいやしなから母なむ宮なりける。
  - ② 深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり
  - ③ 「命長きは憂きことにこそありけれ」と思しけり。
- イ 過去    ロ 詠嘆

③	②	①

### 【基本ドリル】の解答

- A I ① し    ② しか    ③ ける
- A II ロ
- B イ

①	②	③

# 8 助動詞(二)「つ」「ぬ」

## 《ポイントA》 「つ」「ぬ」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用例
連用形	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ変型
連用形	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	下二段型

「つ」の未然形・連用形の「て」は、「てむ」「てけり」などのように、下に助動詞を伴うことが多い。接続助詞「て」と間違えないように注意しよう。  
 「ぬ」の未然形「な」は、品詞分解などで見落としがちである。前後の接続に注意すること。

【例】花も散り<sup>上が連用形</sup>な<sup>下が未然形接続</sup>ば、い<sup>上</sup>か<sup>下</sup>がはせむ。

「〜にき」「〜にけり」「〜にたり」「〜にけむ」の「に」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

## 《ポイントB》

- 「つ」「ぬ」の意味
- 完了(〜てしまふ・〜てしまった・〜た)
  - 強意(きつと・必ず)
- ※「〜なむ」「〜てむ」「〜ぬべし」「〜つべし」のように、下に推量の助動詞を伴うときは、強意となることが多い。

## 【基本ドリル】

A 次の例文から完了・強意の助動詞「つ」「ぬ」に傍線を引け。(全部で七箇所)

- 風吹きて、雨も降りぬ。
- 雨降りなば、花も散りぬべし。
- 見ふたりつるほどに、寝むとは思はねど、まどろみてけり。
- 夢に、清けなる人、立ちて手招きしつ。
- 声をかけんとすれど、逃げ去りにけり。

B 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- 「観音助け給へ」とこそ思ひつれ。

--

- 「今日梅の木に、鶯の来たりて鳴きぬべし」と聞きて聞き<sup>b</sup>に行きぬ。

b	a

## 【練習ドリル】

1 次の例文から助動詞「つ」「ぬ」を抜き出し、その活用形を答えよ。

- 水おびただしくわき上がつて、ほどなく湯にぞなりにける。
- くちなはを大井川に流してけり。
- 「はや、殺し給ひてよかし」
- 玉の緒よ、絶えなば絶えね。

④	③	②	①
形	形	形	形

3 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- 船に乗りなむとす。
- 花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間<sup>※</sup>に

②	①

③	①
④	②

- 恋すてふ我が名はまだきたち<sup>a</sup>けり人知れずこそ思ひ初めしか
- 「まづこの院を出でおはしまし<sup>b</sup>」とそそのかす。

2 次の例文の空欄に、助動詞「ぬ」を適当な形に活用させて入れよ。

- ぬはたまの夜は更け<sup>a</sup>ら<sup>b</sup>し。
- 「主おはせずとも、さぶらひ<sup>a</sup>む<sup>b</sup>」

## 【基本ドリル】の解答

- A
- ぬ
  - な・ぬ
  - つる・て
  - つ
  - に
- B
- 思った
  - a きつと鳴くだろう  
b 行った

○「つ」と「ぬ」はよく似た動きをするので、一緒に覚えてしまおうよ。  
 ○「ぬ」は、「打消す」の連体形と区別できるようにする。  
 (26「ぬ(ね)」の識別参照)



# 9 助動詞(三) 「ず」

## 《ポイントA》 「ず」の接続と活用

未然形	ず	ざり	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ	特殊型
接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
		(ず)	ず	ず	ぬ	ね	○	

※「ざらざり……」というザリ系列は、「ず」(連用形)に「あり」(ラ変)がついてきた形で、主に、下に助動詞がつくときに用いられる。  
 ※「ず」の後に、終止形接続の助動詞(「べし」「らむ」など)が続く時には、「ずべし」「ずらむ」とはならず、「ざるべし」「ざるらむ」のように、ザリ系列の連体形に接続する。

## 《ポイントB》 「ず」の意味

打消 (〜ない)  
 「ずは」「ずば」は、仮定条件で、「もし〜ないならば」と訳す。  
 「ねば」は、確定条件で、「〜ないので・〜ないと」と訳す。  
 「なば」は、「完了の助動詞「ぬ」の未然形 + ば」であって、「〜てしまうならば・もし〜たならば」と訳す。打消と間違えないように注意しよう。

## 【練習ドリル】

1 次の例文から助動詞「ず」を抜き出し、その活用形を答えよ。

- ① 京には見えぬ鳥なればみな人知らず。
- ② 秋にはあらねど、あはれさしまざりけり。

	②	①		抜き出し
				活用形
	形	形	形	形

2 次の例文の空欄に、助動詞「ず」を適当な形に活用させて入れよ。

- ① 船の人も見え  なりぬ。
- ② 隅田川なら  ば、名に負ふ都鳥も見えざりけり。
- ③ 時知ら  山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪の降るらむ
- ④ 「なごてかさぶらは  む」

## 【基本ドリル】

A 次の例文の空欄に、左の訳を参考にして、打消の助動詞「ず」を入れよ。

- ① 知ら  a 人の中にうち臥して、いも寝られ  b。  
知らない人の中に横になって、眠ることもできない。
- ② わが身の憂きは、なにことも言はれ  c けり。  
自分の身のつらさは、なんにも言うことができないなあ。
- ③ かれ、人にはあら  d べし。物の怪なんめり。  
あれは、人間ではないであろう。化け物であるようだ。

c	a
d	b

B 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- ① 雲もなし。月出ですは、星見るにはよき夜ならむ。
- ② 風吹かねば、船も進まず。

②	①
---	---

3 次の例文の傍線部を、解答例にならって、品詞分解せよ。

(解答例) 名詞 動詞・四段・連用形 助動詞・過去・終止形  
 雨 降 り け り。

④	①	②	③
---	---	---	---

- ① 齒黒め付けねば、いと世づかず。
- ② 飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ

②	①
声も聞こえぬ	世づかず 付けねば

## 【基本ドリル】の解答

- A a ぬ b ず c ざり d ざる  
 B ① もし月が出ないならば  
 ② 風が吹かないので

○「ず」の活用を覚える。  
 ○ザリ系列の使い方を理解する。  
 ○連体形を完了の助動詞「ぬ」と区別できるようにする。(26「ぬ」の識別参照)

# 10 助動詞(四) 「たり」「り」

○「り」の接続を確認する。



## 《ポイントA》 「たり」「り」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
サ未四巴	り	ら	り	り	る	れ	れ	ラ変型
連用形	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	ラ変型

③ 「り」の接続はサ変動詞の未然形か四段動詞の已然形(命令形)助動詞「り」は必ずエ段音が上にある。

エ段 ↓ 「り」の未然形

エ段 ↓ 「り」の連体形

エ段 ↓ 「り」の已然形

(参考) よき人とぞ言ひける。(上がエ段でもサ変・四段の活用語尾でなければだめ)

## 《ポイントB》

- 「たり」「り」の意味
- 完了(してしまふ・してしまつた・した)
  - 存続(してゐる・していた・してある・してあつた)
- ※完了とは動作や状態が終わつたこと、存続とは続いていることを言う。  
「〜ている」「〜である」と訳せたら存続、訳せないなら完了が原則。

## 【基本ドリル】

A I 次の例文の空欄に、助動詞「り」を活用させて入れよ。

- 花咲け  時、会ひけり。
- 鳥鳴け  むこと、いとをかし。

②	①

A II 次の  の動詞を適する形に活用させよ。

- 風  吹くる折あはれなり。
- 月を見ることなど  す  り。

②	①

B 次の例文を太字の助動詞に注意して訳せ。

- 何とも思へらず。
- 詠める歌。

②	①

## 【練習ドリル】

1 次の例文の完了の助動詞「り」に傍線を付け、その活用形を答えよ。

- 立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず。
- いと思ひのほかなる人の言へれば、人々あやしがる。
- あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや
- やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。
- 今宵はただに臥し給へれ。

④	①
形	形
⑤	②
形	形
	③
	形

2 次の例文の空欄に、「り」か「たり」の適する方をそれぞれ入れよ。

- つれづれなれば、物語をせ  。
- 飛鳥川、淵瀬変はず流れ  。

3 次の歌の傍線部を助動詞に注意して訳せ。

白波に秋の木の葉の浮かべる <sup>a</sup>を海人の流せる舟かとぞみる <sup>b</sup>

b	a

④	①
	②
	③

- 木がいたづらに立て  。
- 木をいたづらに立て  。

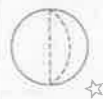
## 【基本ドリル】の解答

- A I ① る ② ら
- A II ① 吹け ② せ
- B ① 何とも思っていない。
- ② 詠んだ歌。



# 12 助動詞(六)「す」「さす」「しむ」「しむる」

○「す」「さす」「しむ」「しむる」の意味を見分けられるようにする。



《ポイントA》  
「す」「さす」「しむ」「しむる」の接続と活用

接続	未然形	基本形	未然形	活用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
未然形	しむ	さす	しめ	しむる	しむれ	しめよ	下二段型		
未然形	す	せ	せ	す	すれ	せよ	下二段型		
未然形	さす	させ	させ	さす	さすれ	させよ	下二段型		

※「す」は四段・ラ変・ナ変動詞の未然形に、「さす」はその他の未然形に接続する。  
※「しむ」は動詞の未然形に接続する(漢文訓読調の文章などにしか出てこない)。

《ポイントB》

「す」「さす」「しむ」「しむる」の意味

- ① 使役(〜せる・〜させる)
  - ② 尊敬(〜なさる)
- ※直下に尊敬語(給ふ・おはす・おはします)がないときは、必ず使役。  
※直下に尊敬語(給ふ・おはす・おはします)があるときは、原則として尊敬。  
ただし「誰々に」という、何かをさせる相手を書いてあるか、書いてなくても補えるときは使役。

〔例〕女房に「歌詠ませ給ふ(女房に歌を詠ませなさる)。」

〔基本ドリル〕

A 次の□の助動詞を適する形に活用させよ。

- ① 中宮は二十二になら□す 給ふ。
- ② 鐘の声を聞こし召して詩作ら□しむ 給ふ。
- ③ 名をこそつけ□さす。

①
②
③

B 次の傍線部の助動詞の文法的意味として最も適当なものを、後の選択肢の中からそれぞれ選べ。

- ① 月の都の人、とらへさせむ。
- ② 帝の御身は疲れさせおはします。
- ③ 公も行幸せしめ給ふ。
- ④ 隨身に大御酒持たせ給ふ。

④	③	②	①
---	---	---	---

イ 使役    ロ 尊敬

イ 尊敬    ロ 使役

a
b
c
d

〔練習ドリル〕

1 次の例文の助動詞「す」「さす」「しむ」に傍線を付け、その活用形を答えよ。

- ① 御格子あげさせて、御簾を高く巻きあげたり。
- ② 食はすれば食ひ、食はせねば食はであり。(二つ)
- ③ 愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。
- ④ 柵を切り落とさせ給へ。

③	①		
形	形		
④	②		
形	形		
			形

2 次の例文の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、後の選択肢の中からそれぞれ選べ。

- ① 御年三十にぞならせおはしましける。
- ② 殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらはせ給ふ。
- ③ 燕の巢に手をさし入れさせ探りけり。

3 次の傍線部を口語訳せよ。

- ① 上も聞こし召し、めでさせ給ふ。
- ② 供の者に手綱を持たせ給ふ。

②	①
---	---

〔基本ドリル〕の解答

- A ① せ    ② しめ    ③ さすれ
- B ① イ    ② ロ    ③ ロ    ④ イ

# 13 助動詞(七)「む」「むず」「じ」

○「む」の四つの意味を押さえることが最も重要。

### 《ポイントA》

「む」「むず」「じ」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
未然形	(んむ)	○	○	(んむ)	(んむ)	め	○	四段型
未然形	(んむず)	○	○	(んむず)	(んむずる)	(んむずれ)	○	サ変型
未然形	じ	○	○	じ	じ	じ	○	無変化型

### 【基本ドリル】

A I 次の( )の動詞を、助動詞に注意しながら活用させよ。

- ① (見る)む。
- ② (す)むず。
- ③ (言ふ)じ。

③	②	①

### 《ポイントB》

「む」「むず」の意味

- ① 推量 (〜だろう)
- ② 意志 (〜よう・〜たい)
- ③ 婉曲・仮定 (〜ような・〜たら)
- ④ 適当・勧誘 (〜ほうがよい・〜ませんか)

「じ」の意味

- ① 打消推量 (〜ないだろう)
- ② 打消意志 (〜まい・〜ないつもりだ)

※「じ」は「む」の打消である。

A II 次の( )の助動詞を、適当な形に活用させよ。

- ① 雨こそ降ら(む)。
- ② 雨や降ら(むず)。

②	①

B 次の傍線部の助動詞の意味を、後の選択肢から選べ。

- ① 翁の申さむことを聞き給へ。
- ② いくさに負けることはよもあらじ。
- ③ われ、東の方に住むべき所求め行かむ。

③	②	①

I 推量                      口意志                      ハ 婉曲  
 ニ 適当・勧誘            ホ 打消推量            ヘ 打消意志

### 【練習ドリル】

1 次の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

- ① 「この度はかならず逢はむ」と、女の心にも思ひをり。
- ② 「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」
- ③ 「かのもと国より、迎へに人々まうで来むす」
- ④ 子といふものなくてありなむ。
- ⑤ 一生の恥、これに過ぐるはあらじ。
- ⑥ 思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。
- ⑦ 「われはしかじかのことありしかば、そこに堂を建てむずるぞ」

I 推量                      口意志                      ハ 仮定・婉曲  
 ニ 適当・勧誘            ホ 打消推量            ヘ 打消意志

⑤	①
⑥	②
⑦	③
	④

2 次の傍線部の現代語訳として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

- ① 「なかくは急ぎ給ふ。花を見てこそ帰り給はめ」  
 I お帰りになるだろう  
 口 帰っただろう  
 ハ お帰りになりませんか  
 ニ 帰ることにしよう
- ② 女の盛りになりなば、髪もいみじく長くなりなむ。  
 I きつとなるだろう  
 口 なっただろう  
 ハ おそらくなるほうがよい  
 ニ 必ずなるようにしよう

①	
	②

### 【基本ドリル】の解答

- A I ① 見                      ② せ                      ③ 言は  
 A II ① め                    ② むずる  
 B ① ハ                      ② ホ                      ③ 口

# 14 助動詞(八) 「らむ」「けむ」

## 《ポイントA》

「らむ」「けむ」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
終止形 <small>ラ変型は連体形</small>	(らむ)	○	○	(らん)	(らん)	らめ	○	四段型
連用形	(けん)	○	○	(けん)	(けん)	けめ	○	四段型

「らむ」「けむ」は、「む」と活用の型は同じである。

## 〔基本ドリル〕

A I 次の例文「来」の読みをそれぞれ記せ。

- ① 来らむ
- ② 来けむ

②	①
---	---

A II 次の空欄にラ変動詞「あり」を活用させて記入せよ。

①	②
らむ	けむ

B 次の傍線部「らむ」の中で、助動詞一語からなるもの一つ選べ(接続に注意すること)。( )

- ① かたちのすぐれたらむぞあらまほしき。
- ② 化粧したらば、うつくしからむ。
- ③ 娘ただ一人侍らむ。
- ④ いかにおぼつかなく思ふらむ。

## 《ポイントB》

「らむ」の意味

- ① 現在推量(今ころは〜ているだろ)
- ② 現在の原因推量(どうして〜だろ)
- ③ 現在の伝聞・婉曲(〜とかいふ)

「けむ」の意味

- ① 過去推量(〜ただろ)
- ② 過去の原因推量(どうして〜ただろ)
- ③ 過去の伝聞・婉曲(〜たとかいふ)

「らむ」は三つの意味があるが、たいていは「〜だろ」と訳せば意味がとれる。ただし、文法的意味が問われる場合、①の現在推量であることが多い。「けむ」は①の「〜ただろ」の意味が基本である。「らむ」は識別問題として問われることがある。

〔例〕あらむ(あらむ)  
高からむ(高からむ)  
知れらむ(知れらむ)

「む・らむ・けむ」で、未来・現在・過去の推量と覚えておけばよい。

## 〔練習ドリル〕

1 次の例文の傍線部を助動詞に注意して口語訳せよ。

- ① 昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方に行きて、
- ② 憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ
- ③ 死にけむこそあはれなれ。

③	②	①
---	---	---

2 次の例文の空欄に「らむ」か「けむ」を適当な形に活用させて入れよ。

- ① 色も香も昔の濃さに匂へども植ゑ  人の影を恋しき
- ② 吉野川岸のやまぶき咲きにけり峰の桜は散りはてぬ

①	②
---	---

3 次の例文の傍線部「らむ」について、文法的説明の正しいものを後の選択肢からそれぞれ一つ選べ。

- ① 折にふれば、何かはあはれならざらむ。
- ② 何事にかあらむ、ことごとしくのしりて、
- ③ 生けらむほどは武に誇るべからず。
- ④ かくて都にあるならば、また憂き目を見むずらむ。

- イ 助動詞
- ロ 助動詞の一部+助動詞
- ハ 助動詞+助動詞
- ニ 動詞の一部+助動詞

①	②	③	④
---	---	---	---

## 〔基本ドリル〕の解答

- A I ① く ② き
- A II ① ある ② あり
- B ④

○現在推量の「らむ」と過去推量の「けむ」はセットで覚える。





# 15 助動詞(九)「べし」「まじ」

## 《ポイントA》「べし」「まじ」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
終止形 (ラ変型は連体形)	べし	(べく)	べく	べし	べき	べけれ	べかれ	形容詞型
終止形 (ラ変型は連体形)	まじ	(まじく)	まじく	まじ	まじき	まじけれ	まじかれ	形容詞型

## 【基本ドリル】

A 次の例文の助動詞「べし」に傍線を引き、その活用形を答えよ。

- わづらひて、心地死ぬべくおぼえけり。
- 時鳥鳴くべき時近づきぬ。
- 恐るべかりけるは、ただ地震なりけり。
- 歌の返し、とくこそすべけれ。

③	①
形	形
④	②
形	形

## 《ポイントB》

「べし」の意味

- 当然(〜はずだ・〜べきだ)
- 推量(〜だろう・〜そうだ)
- 意志(〜よう)
- 可能(〜できる)
- 適当(〜ほうがよい)
- 命令(〜せよ)

「まじ」の意味

- 打消当然(〜はずがない・〜べきでない)
- 打消推量(〜ないだろう)
- 打消意志(〜まい・〜ないつもりだ)
- 不可能(〜できない)
- 不適当(〜ないほうがよい)
- 禁止(〜するな)

「べし」は最も多くの意味を持つ助動詞で、明確に区別しにくいのが、六つの意味を覚えておいて、文脈にふさわしいものを選んでゆく。

B 次の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つ選べ。

- 黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。
- 薬のほかはなくとも事欠くまじ。
- 「頼朝が首、わが墓の前に懸くべし」と命じけり。
- 「人に聞かすな。人に漏らすまじ」と口固めけり。

①	②	③	④
---	---	---	---

## 【練習ドリル】

1 次の例文の空欄に「まじ」を適当な形に活用させて入れよ。

- 冬枯れの景色こそ秋にはをさをさ劣る
- この女見では世にある  心地しけり。

2 次の傍線部の口語訳として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

- 惟光の朝臣の宿る所にまかりていそぎ参るべきよし言へ。  
イ 急いで参上しようと      ロ 急いで参上せよと  
ハ 急いで参上するだろうと      ニ 急いで参上できると

- 「消息をつきつきしう言ひつべからむ者ひとり」と召せば、  
イ 言ったであろう人      ロ 言おうとする人  
ハ 言うことができそうな人      ニ 言ってしまった人

- 咲きぬべきほどの梢 散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。  
イ 今にも花の咲きそうな梢      ロ 花が咲いたにちがいない梢  
ハ 花が咲いてほしい梢      ニ 今まさに花の咲いている梢

○「べし」は六つの意味を覚える。  
○「まじ」は「べし」を打ち消した意味を持つ。

## 【基本ドリル】の解答

- A ① べく・連用      ② べき・連体  
③ べかり・連用      ④ べけれ・已然
- B ① イ      ② ニ      ③ ハ      ④ ホ

④	①
⑤	②
	③

- 御文にも「おろかにもてなし給ふまじ」とかへすがへすいませめたまへり。  
イ 適当に扱いなさい      ロ いいかげんに扱わないだろう  
ハ 愚かな扱いはできない      ニ おろそかに扱ってはいけない
- 人のたはやすく通ふまじからむ所に跡を絶えて籠もり居なむ。  
イ たやすく通っていきける所      ロ 簡単に通っていきはすの所  
ハ たやすくは通えない所      ニ 簡単には通わなかつた所

# 16 助動詞(十) 「なり」「なり」

○二種類の「なり」の違い(接続・活用・意味)をよく覚える。



## 《ポイントA》

伝聞推定の「なり」と断定の「なり」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
終止形 (ラ変型は連体形)	(伝聞推定) なり	○	(なり)	なり	なる	なれ	○	ラ変型
連体形 (断定)	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	形動型
体言	なり	なら	に	なり	なる	なれ	なれ	

※助動詞「なり」は二種類あるので、まず接続によって両者を区別する。

断定「なり」の連用形「に」は、下に「あり」や「侍り」を伴うことが多い。

〔例〕 わが思ふ人には待らず(私の想う人ではありません)。

伝聞推定の「なり」の上は撥音便化しやすい。

〔例〕 「あんなり(あなり)」「ざんなり(ざなり)」「なんなり(ななり)」

あるなり ↓ あんなり・あなり

撥音便形 撥音無表記形

## 《ポイントB》

「なり」の意味

① 伝聞(〜とかいふ・〜そうだ)	① 断定(〜である)
② 推定(〜ようだ・〜が聞こえる)	② 存在(〜にある・〜にいる)

伝聞推定とは、うわさや音や声による聴覚推定である。  
存在の「なり」とは、「(どこそこ)にある」ことを表す。

〔例〕 駿河なる富士の山(駿河にある富士の山)

## 【基本ドリル】

A 次の例文の「なり」を伝聞推定と断定に分類せよ。

- ① 秋の野に松虫の声すなり。
- ② おのが身は月の都の人なり。
- ③ かかることは女もするなり。
- ④ 物語といふものあんなり。

伝聞推定	断定
------	----

B 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- ① 京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。
- ② うつくしきものにあらず。
- ③ 春日なる三笠の山に出でし月かも
- ④ 耳を澄ませば、人泣く声すなり。

④	③	②	①
---	---	---	---

## 【練習ドリル】

1 次の三つの例文の傍線部「なり」について説明した文の空欄に入れるに適切な語を、後の選択肢からそれぞれ選べ。

- ① 比叡の山ひがひのふもともととなれば、雪いと高し。
- ② 人をして呼ばすれど、答へこたへざなり。
- ③ 手をおびただしくはたはたと打つうちなる。

例文①の「なれ」は **A** に接続しているので、**B** である。例文②の「なり」の上の「ざ」は、もとの形は **C** で、その撥音便無表記形であるから、この場合「なり」は **D** である。例文③の「なる」の上の「打つ」は四段活用動詞で、**E** と **F** とが同形なので、接続からは「なる」は判定できないが、「はたはたと打つ」という音を表す語句があるので、「なり」は **G** である。

イ 断定の助動詞    ロ 推定の助動詞    ハ 未然形    ニ 連用形  
ホ 終止形    ヘ 連体形    ト 体言    チ ざり  
リ ざる

2 次の例文の傍線部「に」を完了の助動詞と断定の助動詞とに分類せよ。

- ① この川飛鳥川とががにあらねば、淵瀬ふちせさらには変はらざりけり。
- ② 過ぎにし方の恋しさのみぞせんかたなき。
- ③ 河内へも行かずなりにけり。
- ④ 世にありがたきものには侍りけり。
- ⑤ 我を思ふ人を思はぬ報いにやわが思ふ人の我を思はぬ

完了	断定
----	----

## 【基本ドリル】の解答

- A 伝聞推定—①・④    断定—②・③
- B
- ① 鳥であるので
  - ② かわいい(美しい)ものではない
  - ③ 春日にある三笠の山
  - ④ 泣く声がするようだ

# 17 助動詞(十一) 「めり」「らし」・音便

○「めり」は多用されるが、「らし」は数の中でのみ用いられる。  
○音便形はもとの形にもどせるようにしておく。



## 《ポイントA》

「めり」「らし」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
終止形 <small>(ラ変型は連体形)</small>	めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○	ラ変型
終止形 <small>(ラ変型は連体形)</small>	らし	○	○	らし	らし	らし	○	無変化型

※「らし」は「じ」と同様に形の変わらない助動詞である。

## 《ポイントB》

「めり」の意味

- ① 推定・婉曲(「ようだ」〔視覚推定〕)  
「めり」はいつも「ようだ」と訳しておけばよい。

② 「らし」の意味

- ① 根拠のある推定(「らしい」)

## 《ポイントC》

助動詞の音便

- ① イ音便 へき↓べい  
[例] いとほしうもあるべいかな。  
② ウ音便 べく↓べう まじく↓まじう まほしく↓まほしう  
[例] 聞こえまほしう侍り。  
③ 撥音便 ざるめり↓ざんめり(ざめり) たるなり↓たんなり(たなり)  
[例] ただ事にも侍らざめり。

## 【基本ドリル】

A 次の例文の空欄に「めり」を適当に活用させよ。

- ① 泣く□□ど、涙落つとも見えず。  
② 人たがへにこそ侍る□□。  
③ 竜田川もみぢ乱れて流る□□。

③	②	①

B 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- ① 恐ろしと思ひつるにこそあるめれ。  
② 日も暮れ方になりぬめり。

②	①

C 次の傍線部の音便形をもとの形に直せ。

- ① 何事をか奏すべかんなる。  
② 館より呼びに文持て来たなり。

②	①

## 【練習ドリル】

1 次の傍線部の音便形をもとの形に直せ。

- ① 秋の夜は露こそことに寒からし草むらことに虫のわぶれば  
② 兵衛太郎、兵衛次郎共に討ち死にしてんげり。  
③ ひとときは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。  
④ いとど忍びがたく思すべかめり。  
⑤ 車より落ちぬべうまろび給へば、

⑤	③	①
	④	②

2 次の例文について、後の二つの問に答えよ。

命こそかなひ難かべいものなめれ。

- (1) 例文には音便形が三ヶ所ある。これをすべてもとの形に直した文にせよ。

--

(2) 例文の現代語訳として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

- イ 命あってこそ難しい願いもかなうことになるだろう。  
ロ 命はあっても難しい願いはかなうことはないだろう。  
ハ 命は時には思い通りになるものでもあるようだ。  
ニ 命は思い通りになりにくいはずのものであるようだ。

--

## 【基本ドリル】の解答

- A ① めれ ② めれ ③ めり  
B ① 思ったのであるようだ。  
② なったようだ  
C ① べかるなる ② たるなり

# 18 助動詞(十二) 「まし」「まほし」

## 《ポイントA》

「まし」「まほし」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
未然形	まし	ましか (ませ)	○	まし	まし	ましか	○	特殊型
未然形	まほし	まほしく (まほしく)	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○	形容詞型
		まほしから	まほしかり	○	まほしかる	○	まほしかれ	

※「まし」の未然形は「ましか」と「ませ」の二通りあるが、「ませ」は入試古文ではあまり使われない。

## 【基本ドリル】

**A** 次の例文の空欄に、左の訳を参考にして、「まし」か「まほし」を適当に活用させよ。

- 鏡に色、形あら  ば、映らざら  。
  - 鏡に色や形があったならば何も映らなかつただろうに。
  - 人の、子生みたるに、男、女、とく聞か  。
- 人が子を生んだときには、男か女か早く聞きたい。

①	②
---	---

**B** 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- これに何を書かまし。
- 行かまほしき所へ去ぬ。
- 世の中にあたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

③	②	①
---	---	---

## 【練習ドリル】

**1** 次の例文の傍線部は、「反実仮想」か、「ためらいを含む意志」か、二つに分類し、番号で答えよ。

- 時ならず降る雪かとぞながめまし花はな橋はなばなの薫かほらざりせば
- なほこれより深き山を求めてや跡絶えなまし。
- 昼ならましかば、のぞきて見奉りてまし。
- いかにせまし。忍びてや迎へ奉りてまし。

反実仮想	
ためらいを含む意志	

**2** 次の傍線部の後に補う言葉として、最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選べ。

大きな柑子かんじの木の、枝もたわわになりたるが、まほりをきびしく困こひたりしこそ、少しことさめて、「この木なからましかば」とおぼえしか。

- イよけれ  
ロよからまし

ハよかりき  
ニよからず

**3** 次の例文の空欄に「まほし」を適当に活用させて書き入れよ。

- 愛敬あいぎやうありて、言葉多からぬこそ、飽かず向かは  。
- いかなる人なりけん、たづね聞か  。
- 行か  思ふに、兄上せうとなる人抱いだきて率ひらて行きたり。
- 少しの事にも先達せんだつはあら  ことなり。

## 【基本ドリル】の解答

- A** ① ましか・まし ② まほし
- B** ① 何を書こうかしら ② 行きたい所
- ③ 桜がなかったならば春の(人の)心はのどかだっただろうに

1 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の傍線部の活用形を記せ。

- ① いづれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひ給ひける中に、  
いつの帝の御時代であろうか、女御や更衣が、おおせいお仕えしなまきつていた中で、
- ② 春はあけぼの、やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし明かりて、  
春は夜明けごろ（が趣き深い）、だんだん白くなってゆく山に接した空が、少し明るく  
なって、
- ③ ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらさず。  
流れてゆく川の流れは絶えることがなく、しかももとの水ではない。
- ④ つれづれなるままに、ひぐらし硯にむかひて、  
所在ないのにかまかせて、一日中硯に向かつて、
- ⑤ 祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。  
祇園精舎の鐘の音は、すべてのものが永遠ではない（といっているような）響きがある。

④	①
連用形	連用形
⑤	②
終止形	連体形
	③
	未然形

2 次の例文の空欄に、( )内の動詞を、適当な形に直して書き入れよ。

- ① 昔、太郎入道と( )人ありけり。(いふ)  
昔、太郎入道という人がいた。
- ② 土に( )むとす。(落つ)  
地面に落ちようとする。

- ↓ ①「人」は体言なので、連体形に活用させる。「いふ」はこのままの形で連体形になる。
- ↓ ②「む」の上は未然形。「落つ」の未然形は「落ち」。

【解説】

1 活用形を考えるには、まず下につく語を確認する。

- ↓ ①「ける」の上にあるから連用形。
- ↓ ②「山ぎは」は名詞(＝体言)。体言の上につくのは連体形。
- ↓ ③「ず」の上にあるから未然形。
- ↓ ④「て」の上にあるから連用形。
- ↓ ⑤文が終わっているから終止形。上に係助詞がないのを確認すること。

2 直下につく語から、空欄部の活用形を決定し、適当な形に活用させる。

- ↓ ①「人」は体言なので、連体形に活用させる。「いふ」はこのままの形で連体形になる。
- ↓ ②「む」の上は未然形。「落つ」の未然形は「落ち」。
- ↓ ③「けり」の上は連用形。「見ゆ」は「現れる」という意味で、連用形は「見え」。
- ↓ ④「て」の上は連用形。「盗む」の連用形は「盗み」。
- ↓ ⑤「ども」の上は已然形。「過ぐ」は「過ぎる」の意味で、已然形は「過ぐれ」。「過ぎれ」としないように注意すること。

3 次の傍線部の活用形を、後から選び、記号で答えよ。

- ① 恐ろしくても寝られず。  
a 恐ろしくても寝ることもできない。  
b
- ② 見れば、いと大きな木立ちたり。  
c 見ると、たいそう大きな木が立っている。  
d 見れば、いと大きな木立ちたり。  
e

イ 未然形    ロ 連用形    ハ 終止形  
ニ 連体形    ホ 已然形    ヘ 命令形

④	①
盗み	いふ
⑤	②
過ぐれ	落ち
	③
	見え

e	a
ハ	ロ
	b
	イ
	c
	ホ
	d
	ニ

3 ②と同様、下につく語から傍線部の活用形を考えればよい。ここでは、傍線部そのものの形や文脈も考慮すること。

- ↓ a「て」の上は連用形。
- ↓ b「られ」の上は未然形。
- ↓ c「ば」の上は未然形か已然形だが、未然形だと考えると「もし見たら」と訳することになる。それでは後の文につながっていないから、「見ると」見たところ」と訳す已然形が答えとなる。
- ↓ d「木」は体言。体言につくのは連体形。
- ↓ e文が終わっていて、上に係助詞がないから終止形。

4 次の傍線部の活用形を答えよ。

- ① 酔ひたる人ぞ憂きを思ひ出でて泣くめ<sup>る</sup>。  
酔った人はつらいことを思い出して泣くようだ。
- ② 夜は誰とか寝<sup>む</sup>。  
夜は誰と寝ようか。
- ③ 稲妻の光の間にもわれや忘<sup>る</sup>る。  
稲妻の光の間にも自分を忘れることがあるか、いや、ない。
- ④ その人、かたちよりは心なむまさりたりけ<sup>る</sup>。  
その人は、容貌よりも、性格が優れていた。
- ⑤ 散ればこそいと桜はめでたけれ。  
散るからこそますます桜はすばらしい。

④	①
連体形	連体形
⑤	②
已然形	連体形
	③
	連体形

4 「ぞ・なむ・や・か」の結びは連体形。「こそ」の結びは已然形。

- ↓ ①係助詞「ぞ」の結びは連体形。
- ↓ ②係助詞「か」の結びは連体形。
- ↓ ③係助詞「や」の結びは連体形。
- ↓ ④係助詞「なむ」の結びは連体形。
- ↓ ⑤係助詞「こそ」の結びは已然形。

5 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- ① われをつらしと思ふ事やあるか。  
私を薄情だと思ふことがあるか。
- ② もののあはれは秋こそまされ。  
ものの趣深さは秋がまさるものだ。
- ③ その中に本光る竹なむ一筋ありける。  
その中に根本が光る竹が一本あった。
- ④ 山の名を何とか申すと問ふ。  
山の名前を何と申しあげるのがかと尋ねる。
- ⑤ 花として飽かず眺むることやはある。  
花だからといって、いやにならずに眺めることがあるか、いや、ない。

⑤	④	③	②	①
眺めることがあるか、いや、ない。	何と申しあげるのがか。	竹が一本あった。	秋がまさる(ものだ)。	思うことがあるか。

5 「ぞ・なむ・こそ」は「強意」。「や・か」は「疑問」か「反語」。

- ↓ ①「や」連体形」の形は、疑問か反語が考えられるが、ここでは「われを」とあるから、相手に尋ねていることになる。疑問で訳す方がよい。
- ↓ ②「こそ」已然形」の形は、強意。「こそ」を取り払うと「秋まさる」となり、「秋がまさる」と訳すことになる。
- ↓ ③「なむ」連体形」も②と同様、強意を表す。「なむ」を取り払って訳せばよい。
- ↓ ④「か」連体形」だが、「と問ふ」とあるから疑問で訳す。
- ↓ ⑤「やは」連体形」の形は反語が多い。

2 「練習ドリル」の解答

1 次の和歌の傍線①②③の動詞を解答例に従って文法的に説明せよ。

春来ぬと人は言へどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ  
春が来たといふは言へども、鶯が鳴かないかぎりは春ではないだろうと思う。

③	②	①
八行四段活用連体形	カ行四段活用未然形	ハ行四段活用已然形

2 次の動詞の活用表を作れ。

得	見る	出づ	消す	
○	○	出	消	語幹
え	み	で	さ	未然形
え	み	で	し	連用形
う	みる	づ	す	終止形
うる	みる	づる	す	連体形
うれ	みれ	づれ	せ	已然形
えよ	みよ	でよ	せ	命令形

【解説】

1 覚える動詞でない場合は、「ず」をつけて未然形を確認する。

※覚える動詞は3動詞(二)の(動詞の活用の種類の見分け方)を参照

↓①「言へ」の「へ」は、ハ行。終止形は「言ふ」である。未然形は「言は」(「ア段」)であるので、四段活用。下に「ども」があるので、已然形。

↓②「ず」をつけると「鳴か」なので、カ行。変格活用の動詞を除いて、未然形がア段になるのは、四段活用しかない。

↓③「ず」をつけると「思は」なので、ハ行四段活用。係助詞「ぞ」の結びなので、連体形。(係り結びの法則)

2 活用の種類を確認し、活用表を作れるようにする。上一段・下一段は覚える動詞なので要注意。

↓「ず」をつけると「消さ」となり、サ行四段活用。

↓「ず」をつけると「出で」となり、ダ行下二段。未然形がエ段なのは、下一段か下二段。下一段は「蹴る」だけ。

↓「見る」は、代表的な上一段動詞である。上一段は「る」の上が「き(着)・み(見)・に(似・煮)・い(射・鑄)・る(居・率)・ひ(干)」と覚える。

↓「得」「寝」「経」は語幹のない下二段活用動詞である。

↓「ず」をつけると、「閉ぢ」となり、ダ行上二段。未然形がイ段なのは、上一段か上二段。上一段は、「見る」の項にあるように数が限られている。  
↓「植う」「飢う」「据う」は、ワ行。

3 終止形が同じでも活用の種類が異なる動詞がある。活用の種類が異なると意味も違ってくる。

↓①四段の「立つ」は「立つ」、下二段の「立つ」は「立てる」の意。

↓②四段の「頼む」は「頼りにする」、下二段の「頼む」は「頼りにさせる」の意。

4 動詞の音便は、基本的に四種類ある。

- a イ音便 書きて ↓ 書いて
- b ウ音便 給ひて ↓ 給うて
- c 撥音便 死にて ↓ 死んで
- d 促音便 立ちて ↓ 立つて

↓①はバ行四段活用の連用形の撥音便。

↓②はラ行四段活用の連用形の促音便。

閉づ	閉
ち	ち
ぢ	ぢ
づ	づ
づる	づる
づれ	づれ
ぢよ	ぢよ

3 次の動詞は四段と下二段の両方に活用する。それぞれの未然形を答えよ。

えよ。

① 立つ	四段	立た	下二段	立て
------	----	----	-----	----

② 頼む	四段	頼ま	下二段	頼め
------	----	----	-----	----

4 次の傍線部は動詞の音便形である。そのもとの形を答えよ。

或は転んで落ち、或はうち折つて死ぬるもあり。

ある人は転んで落ち、またある人は(首の骨を)折つて死ぬ人もいる。

②	①
折り	転び

5 次の傍線部の動詞の、活用の行と種類および活用形を記せ。

- ① 世をば捨つれども、身をば捨てず。  
この世は捨てたけれども、わたし自身は捨てない。
- ② われと思はむ人々は、寄り合へ。  
わたしこそはと思うような人々は、集まれ。
- ③ 四十過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなし。  
四十歳を過ぎてしまうと、容貌を恥ずかしく思う心もない。
- ④ ある人、弓射ることを習ふ。  
ある人が、弓を射ることを習う。
- ⑤ 海の中に、はつかに山見えけり。  
海のむこうに、わずかに山が見えた。

		活用 の行と 種類	活用 形
①	夕行下二段活用		已然 形
②	八行四段活用		未然 形
③	ダ行上二段活用		連体 形
④	ヤ行上二段活用		連体 形
⑤	ヤ行下二段活用		連用 形

5 活用形は、下につく語に注目する。

- ↓ ①「ず」をつけると「捨て」なので、夕行下二段。下に「ども」があるので、已然形。
- ↓ ②「ず」をつけると「思は」なので、八行四段。下に「む」があるので、未然形。
- ↓ ③「ず」をつけると「恥ぢ」なので、ダ行上二段。下に「心」という体言があるので、連体形。
- ↓ ④「射る」は覚える上一段動詞。下に「こと」という体言があるので、連体形。また、ヤ行であることにも注意。
- ↓ ⑤「ず」をつけると「見え」なので、下二段。終止形は「見ゆ」なので、ヤ行であることに注意。下に「けり」があるので、連用形。

6 次の例文から、四段・上二段・上三段・下二段の動詞を書き出し、その活用の行・種類・活用形を答えよ。(解答欄の数は解答数と同じ)

- ① 日数のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。  
日数が(あまりにも)早く過ぎるその程度は、何も似るものがない程である。
- ② 力衰へて分を知らざれば、病を受く。  
体力が衰えて(自分の)限界をわきままえていないと、病気になる。

		動詞	行	種類	活用形
①	過ぐる	ガ行	上二段活用		連体形
	似	ナ行	上一段活用		未然形
②	衰へ	ハ行	下二段活用		連用形
	知ら	ラ行	四段活用		未然形
	受く	カ行	下二段活用		終止形

6 終止形を確認しつつ、もう一度ポイントを振り返り、動詞の活用のパターン・活用語尾などに慣れておく。

- ↓ ①「過ぐる」は「ず」をつけると「過ぎ」なので、ガ行上二段。下に「ほど」という体言があるので、連体形。また、終止形は「過ぐ」であるので、注意。
- ↓ 「似」は覚える上一段動詞「似る」の活用したもの。下の「ぬ」は、助動詞「ず」の活用したものである。したがって下に「ず」があるのと同じこと  
で、「似」は、未然形。(↓9助動詞(三)「ず」参照)
- ↓ 「はやく」は形容詞「はやし」の連用形で、動詞ではないので、注意。
- ↓ ②「衰へ」は「ず」をつけると「衰へ」なので、ハ行下二段。下に「て」があるので、連用形。終止形は「衰ふ」であるので注意。
- ↓ 「知ら」は「ず」をつけると「知ら」なので、ラ行四段の未然形。
- ↓ 「受く」は「ず」をつけると「受け」なので、カ行下二段。係り結びもなくそこで文が終わっているので、終止形。終止形は「受ける」ではないので注意。



3 【練習ドリル】の解答

1 次の傍線部「来」(力変)の読みを記せ。

① 舟に乗りて帰り来けり。  
舟に乗って帰って来た。

② 「いつら、猫は。こち率て来。」  
何処にいるのだ、猫は。こっちに連れてこい。

③ 銭ももて来ず、おのれだに来ず。  
金も持って来ないし、本人も来させない。

①
き
②
こ
③
こ

2 次の例文の空欄に、サ変動詞「す」を活用させて記入せよ。

① われかの心地  て、死ぬべくおぼさる。  
茫然とした気持ちが出て、死にそうにお思いになる。

② もとより友と  人、一人二人して行きけり。  
以前から友人であった人、一人二人と一緒にいった。

③ 夜昼待ち給ふに、年越ゆるまで音も  ず。  
昼夜待ちなされるのだが、年が越えるまで便りが無い。

①
し
②
する
③
せ

【解説】

1 下の語に注意して、力変の活用形を確認する。

↓ ①下に「けり」があるので、連用形。

↓ ②下に「。」(「句点」)があるので、終止形か命令形。文脈で命令の意味があるので、命令形。

↓ ③下に「ず」があるので未然形。

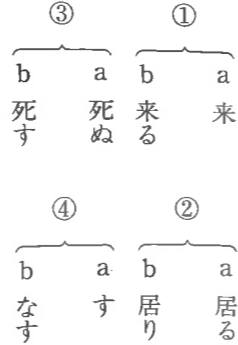
2 下の語に注意して、サ変の活用形を確認する。

↓ ①下に「て」があるので、連用形。

↓ ②下に「人(「体言」)」があるので、連体形。

↓ ③下に「ず」があるので、未然形。

3 次にあげた動詞の、活用の種類をそれぞれ記せ。



③		①	
b	a	b	a
サ行変格活用	ナ行変格活用	(ラ行)四段活用	カ行変格活用
④		②	
b	a	b	a
(サ行)四段活用	サ行変格活用	ラ行変格活用	(ワ行)上一段活用

3 まぎらわしい活用の種類を見分ける。

↓ 覚える動詞の力変(①a)・サ変(④a)・ナ変(③a)・ラ変(②b)動詞を、まず見つける。

↓ ①b「ず」をつけると「来らず」となるので、ラ行四段。

↓ ②a「居る」は覚える上一段動詞。ワ行に注意。

↓ ③b「死す」はサ変。

↓ ④b「ず」をつけると「なさず」となるので、サ行四段。

※活用の種類を問われた場合は、変格活用以外は、活用の行を記さなくてもよい。

4 次の例文の変格活用の動詞を抜き出し、その種類と活用形を答えよ。  
(解答欄は解答数と同じ)

- ① 死なぬ薬を食はざれば、つひに死す。(二つ)  
死なぬ薬を飲まないで、ついに死ぬ。
- ② よきに奏したまへ、啓したまへ。(二つ)  
よろしいように帝に申しあげてください。皇后に申しあげてください。
- ③ 「誰れ誰れかはべる」と問ふこそ、をかしけれ。(二つ)  
「誰と誰がお仕えているか」と尋ねるのは、興味深いことだよ。

	①	②	③
動詞	死な	奏し	はべる
種類	ナ変	サ変	ラ変
活用形	未然形	連用形	連体形

5 次の文中の傍線部は音便形である。それをもとの形に直して答えよ。

世の中に物語といふもののあるなるを、いかで見ばや。  
世の中には物語というものがあるのだがそれを、なんとかして見たい。

ある

4 各変格活用動詞の種類と、それらの活用形・活用語尾に、習熟しておく。

- ↓ ①「死ぬ」はナ変だが、「死す」はサ変なので注意。
- ↓ ②「奏す」・「啓す」はともにサ変。  
「奏す」は、「帝に申しあげる」の意。「啓す」は、「皇后(中宮)・皇太子に申しあげる」の意。
- ↓ ③「はべり」はラ変。係り結びに注意。

5 慣用的な音便にも慣れておく。

- ↓ ラ変動詞「あり」の連体形「ある」が、「めり」「なり」(伝聞推定)「べし」に続くとき、撥音便の生じることが多い。  
もとの形 撥音便形 撥音便の無表記形  
あるめり ↓ あんめり ↓ あめり

6 次の傍線部の、動詞の活用の種類と活用形またその終止形を答えよ。

うつくしきもの。瓜にかきたる児の顔。雀の子の、ねず鳴きするに可愛らしいもの。瓜に描いてある幼児の顔。雀の子が、(人が)鼠鳴きをして呼ぶと、踊をどり来る。二つ三つばかりなる児の、急ぎてはひ来る道に、いとるようにしてやってくるの。二三歳ぐらいの幼児が急いではってくる道に、とてもし小さいこみがあったのをめざとく見つけて、とて可愛らしい指につかまえて、へて、大人などに見せたる、いとうつくし。頭は尼そぎなる児の、目大人などに見せているのは、とて可愛らしい。尼そぎの髪の幼女が、に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきてもものなど見たるも、目に髪がかぶさってくるのをかきあげることほしないで、顔を傾けて物など見ているのも、うつくし。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
活用の種類	(力行)四段活用	サ行変格活用	力行変格活用	ラ行変格活用	(力行)下二段活用	(サ行)下二段活用	(マ行)上一段活用
活用形	連用形	連体形	連体形	連用形	連用形	連用形	連用形
終止形	かく	す	来	あり	見つく	見す	見る

6 全部で九種類ある動詞の活用の種類を考え、それぞれの活用形を確認する。

- ↓ ①「す」をつけると「かかず」となるので、力行四段。
- ↓ ②この活用の種類は、サ変(覚える動詞)。
- ↓ ③この活用の種類は、カ変(覚える動詞)。
- ↓ ④この活用の種類は、ラ変(覚える動詞)。下に「けり」の活用した「ける」があるので、連用形。
- ↓ ⑤「す」をつけると「見つけず」となるので、力行下二段。下に「て」があるので、連用形。終止形は「見す」であって、「見せる」ではないので注意。また「見る」(マ行上一段)・「見ゆ」(ヤ行下二段)との違いに注意。
- ↓ ⑦「見」は上一段動詞(覚える動詞)。「見る」の活用したものである。⑥と同様、下に「たる」があるので、連用形。

4 【練習ドリル】の解答

1 次の傍線部の形容詞の、活用の種類と活用形を記せ。

① なかなかにかしき夜かな。  
かえって趣のある夜だなあ。

② 住吉の浜、いとおもしろければ、おりあつて行く。

住吉の浜は、たいそうすばらしいので、(砂浜まで) おりて腰をおろしたりして行く。

③ いみじからん心地もせず。  
たいそう(うれしい) ような気持ちもない。

	③	②	①	
	シク活用	ク活用	シク活用	活用の種類
	未然形	已然形	連体形	活用形

2 次の□の中の形容詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。

① うつくし こと限りなし。いと ② 幼し ば、籠に入れて養ひけり。  
可愛らしいことはこのうえもない。 とても幼いので、籠に入れて育てた。

②	①
幼けれ	うつくしき

【解説】

1 ク活用とシク活用を区別できるようにし、それぞれの活用形を確認する。

↓ ①「なる」をつけたら「をかしくなる」となるので、シク活用。下に「夜」という体言があるので、連体形。

↓ ②「なる」をつけたら「おもしろくなる」となるので、ク活用。「おもしろけれ」という形は、已然形しかない。「已然形+ば」の形。

↓ ③「なる」をつけたら「いみじくなる」となるが、シク活用というのではなく、シク活用という。下に助動詞「ん(む)」があるので未然形。

2 下につく語に注意して、活用させられるようにする。

↓ ①下に「こと」という体言があるので、連体形にする。「うつくしかる」というカリ系列の連体形は下に助動詞がつくときに用いる。

↓ ②下に「ば」があるので、「未然形+ば」「已然形+ば」。「未然形+ば」は「もしくならば」と訳し、「已然形+ば」は「くなので」などと訳す。この場合、後者が文脈に合う。

3 次の例文の傍線部は、形容詞の音便形である。それをもとの形にもとせ。

五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

五月の月末に、雪がたいそう白く降った。

白く
----

4 次の例文から形容詞を二つ抜き出し、その終止形を答えよ。

ありは、いとにくけれど、水の上などを、ただあゆみにあゆみありくこそをかしけれ。

ありは、とても憎らしいけれど、水の上などを、ひたすら歩き回るのはおもしろい。

	i	
	にくけれ	抜き出し
ii	をかしけれ	終止形
	をかし	

5 次の例文の傍線部を現代語訳せよ。

空さむみ花にまがへてちる雪に少し春ある心地こそすれ

空が寒いので桜の花に見間違えるように散っている雪に少し春がある気もちがする。

空がさむいので
---------

3 形容詞の音便を知る(形容詞の音便には三種類ある)。

①イ音便(連体形に生じる) 若き人 ↓ 若い人

②ウ音便(連用形に生じる) 白く見ゆ ↓ 白く見ゆ

③撥音便(カリ系列の連体形に生じ、「ん」が無表記の場合も多い) 浅かるなり ↓ 浅かんなり ↓ 浅かなり

4 活用語尾に注意しつつ、形容詞を抜き出せるようにする。

↓ i「にくけれ」は下に「ど」があるので、已然形。

ii「をかしけれ」は係助詞「こそ」の結びになっているので、已然形。

5 形容詞の語幹の用法を覚える。

↓ 「形容詞の語幹+み」は、「〜ので」と訳す。「さむ」は形容詞「寒し」の語幹。

\* 「―」を「〜み」の用法は、和歌の中でのみ用いられる。

5 「練習ドリル」の解答

1 次の傍線部の形容動詞の活用形を答えよ。

- ① 優なる北の方の心なるべし。  
優雅な北の方の風流心であるだろう。
- ② あからさまに抱きうつくしむ程に、  
ついちよつと抱いてかわいがっているうちに、
- ③ 今更思ひ出でてあはれなりければ、  
いまさら思い出してしみじみと感慨深かつたので。

③	②	①
連用形	連用形	連体形

2 次の□の中の形容動詞(終止形)を、適当に活用させて答えよ。

- ① 木のさまは **憎げなり** ど、あふちの花いとをかし。  
木の様子は気に入らない様子だけれど、櫻の木の花はたいそう美しい。
- ② 夜は **はなやかなり** 装束、いとよし。  
夜は、華やかな衣装が、とてもいい。

②	①
はなやかなる	憎げなれ

【解説】

- 1 形容動詞の活用形を確認する。  
↓ ①下に「北の方」という体言があるので、連体形。  
↓ ②形容動詞で「〜に」の形は、連用形しかない。  
↓ ③下に連用形に接続する助動詞「けり」が活用した「けれ」があるので、連用形。

2 下の語や記号に注意して、形容動詞を活用させる。

- ↓ ①下に已然形に接続する助詞「ど」があるので、已然形。
- ↓ ②下に「装束」という体言があるので、連体形。

3 次の例文から形容動詞を三つ選び出し、その活用形を答えよ。

大路のさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

(正月の)大通りの様子は、門松がすうつと立てられていて、華やかでうれしそうなのは、またしみじみと感慨深い。

	i	ii	iii
形容動詞	はなやかに	うれしげなる	あはれなれ
活用形	連用形	連体形	已然形

3 活用語尾に注意しつつ、形容動詞を抜き出せるようにする。

- ↓ 「〜やかに」「〜げなり」「〜らかに」は、形容動詞独特の語尾であるので、形容動詞の発見の際、参考にしよう。また、類出する主な形容動詞は、覚えておこう。
- ↓ 「i」は「はなやかに」は、活用を覚えていれば、すぐに連用形とわかる。
- ↓ ii「うれしげなる」は、連体形しかない。(下に体言が省略されている)
- ↓ iii「あはれなれ」は、已然形か命令形だが、ここは係助詞「こそ」の結びだから已然形。

4 形容動詞の活用と意味を確認する。

↓ 下に「せ」というサ変動詞(用言)があるので、連用形になる。また、空欄の下に付く語が助動詞ではない(ここではサ変動詞)ので、「〜に」の方の連用形である。

\* 基本的な形容詞・形容動詞は、その語の意味を確認しておこう。

4 次の□の中の形容動詞(終止形)を適当に活用させて、さらにその一文を現代語訳せよ。

みかどの使ひをば、いかで **おろかなり** **せむ**。

おろかに

現代語訳  
帝の使いをどうしていいかげんに扱うことができ  
るだろうか、いや、できない。

6 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の傍線部を助動詞に注意しながら口語訳せよ。

① 楽しみは三人の児どももすくすくと大きになれる姿を見る時  
楽しみは三人の子供達がすくすくと大きくなった姿を見る時だ。

② この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。  
この人々の深い気持ちは、この海にも劣らないだろう。

①	大きくなった姿
②	この海にも劣らないだろう。

2 次の傍線部の活用形を答えよ。

① 目の前よりはやき水流れたり。  
目の前を通って速い水(川)が流れている。

② この花の咲く折は来む。  
この花が咲くときは、来よう。

③ 和歌の船に乗るべし。  
和歌の船に乗ろう。

①	連用形
②	未然形
③	終止形

【解説】

1 助動詞が活用して(II形を変えて)いても、終止形と訳は変わらない。大切なことは、活用している場合その終止形が見抜けるようになることである。  
↓ ①「なる」+「た」(完了)+「姿」II「なった姿」「なれる」「なれた」という可能を含んだ誤訳をしないこと。「なれ」は完了の助動詞「り」が下にあるので四段助動詞「なる」の已然形である。

↓ ②「劣る」+「ない」(打消)+「だろう」(推量)II「劣らないだろう」

2 活用形を問われたら直下の語を確認する。

↓ ①「たり」は連用形接続の助動詞。

↓ ②「む」は未然形接続の助動詞。

↓ ③「べし」は終止形接続の助動詞。

3 次の□の語をそれぞれ適する形に活用させよ(直下はすべて助動詞で終止形)。

① 五十の春を迎えて、家を出で世を□(そむく)り。

五十歳の春を迎えて、出家し俗世を離れた。

② 国守の□(おはす)なり。「おはす」はサ変・「なり」は断定

国の守がいらっしやったのである。

③ 大納言、南海の浜に□(吹き寄せ)らる。

大納言は、南海の浜に吹き寄せられる。

④ いみじく思し嘆くこと□(あり)べし。

ひどく思い嘆きなまることがあるのだろう。

⑤ ものの音は遠きまされり鳥すら遙かに聞けば□(をかし)けり

(いろいろな)もの音(や声)は遠い方が勝っている(遠くで聞く方がよい)。鳥でさえ遠くで聞くといいんだよなあ。

⑥ めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えむは、□(口惜し)べし。

素晴らしいと(思っ)て見ていた人の、ついがっかりしてしまう本性(生まれつきの性質)が見えるのは残念であるに違いない。

①	そむけ
②	おはする
③	吹き寄せ
④	ある
⑤	をかしかり
⑥	口惜しがる

3 まずは直下の語の接続を確認する。次に空欄の語の活用種類を確認して活用させる。

↓ ①「り」はサ変動詞の未然形か四段助動詞の已然形(命令形)に接続。「そむく」は力行四段活用の助動詞で、その已然形(命令形)は「そむけ」である。

↓ ② 断定の助動詞「なり」は活用語には連体形に接続。「おはす」はサ変動詞なので連体形は「おはする」である。

↓ ③「らる」は未然形に接続。「吹き寄せ」はサ行下二段活用の助動詞で、その未然形は「吹き寄せ」である。

↓ ④「べし」は終止形接続の助動詞であるが、ラ変型活用語には連体形に接続する。「あり」はラ変動詞なので、その連体形「ある」が答え。

↓ ⑤「けり」は連用形接続の助動詞。「をかし」はシク活用の形容詞で、下に助動詞がつくときは原則的に「シカリ」系列を用いる。「シカリ」系列の連用形は「をかしかり」。

↓ ⑥④と⑤を複合した難問。「べし」は終止形接続の助動詞であるが、ラ変型活用語には連体形に接続する。「口惜し」はシク活用の形容詞で、下に助動詞がつくときは原則的に「シカリ」系列を用いる。「シカリ」系列はラ変型の活用するのでその連体形「口惜しがる」が答え。

4 次の□に下二段型の活用をする助動詞「つ」をそれぞれ適する形に活用させて入れよ。

- ① この僧の顔に似□む。  
この僧の顔にきつと似ているだろう。
- ② 昨日なむ都にまうで来□。  
昨日都に参上して来た。
- ③ 雀来ぬべしと申し□ど、来ず。  
雀はきつと来るだろうと申しあげたが、来ない。

③	②	①
つれ	つる	て

4 「つ」を下二段活用させると「て・て・つ・つる・つれ・てよ」活用形の選択(何形を使うか)は直下の語を確認する。

- ↓ ①直下の「む」は未然形接続の助動詞。
- ↓ ②直下は句点。文末である。上部に係助詞「なむ」を確認。係り結びで文末は連体形。
- ↓ ③直下に接続助詞「ど」がある。接続助詞「ど」は已然形接続。

5 次の□の助動詞をそれぞれ適する形に活用させよ。

- ① 母ありしが失せ□ぬき。  
母はいたが死んでしまった。
- ② 舟出だすままに、風にぞ吹か□る。  
船を出すとすぐに、風に吹かれた。
- ③ 抜かむとするに大方抜か□るず。  
抜こうとするが全く抜くことができない。
- ④ 宣長、県居の大人(賀茂真淵)に会ひたてまつりしは、  
(私)宣長が、賀茂真淵(先生)にお会い申しあげたのは、  
この里に一度宿り給へ□りき折、一度のみなりき。  
この里に(先生が)一度お泊まりになつていた時、一度だけだった。
- ⑤ 作文の船にぞ乗る□べしける。  
漢詩を作る船に乗れば良かったなあ。

④	①
り	に
し	②
⑤	③
べかり	れ

5 ポイントおよび基本ドリルEを応用する。

- ↓ ①「ぬ」はナ変型の活用をする。直下の助動詞「き」は連用形接続。
- ↓ ②「る」は下二段型の活用をする。文末であるから上を確認。係助詞「ぞ」があるので文末は連体形。
- ↓ ③「る」は下二段型の活用をする。直下の助動詞「ず」は未然形接続。
- ↓ ④助動詞が連続していてもそれぞれ前問と同じことをすればよい。  
「り」はラ変型の活用をする。直下の助動詞「き」は連用形接続。  
「き」は特殊型の活用をする。「(せ)・○・き・し・しか・○」と活用。  
直下に体言「折」があるので連体形になる。
- ↓ ⑤「べし」は形容詞型の活用をする。形容詞型活用語は、形容詞と同じように下に助動詞がつくときは原則的に「カリ」系列を用いる。「けり」は連用形接続の助動詞であるので、「べかり」が答え。

7 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の過去の助動詞をそれぞれ抜き出せ。

- ① 雨のいと降りしかば、え参らずなりにき。  
雨がひどく降ったので、参上できなくなりました。
- ② 小大進と聞こえし歌詠みなり。  
小大進と申しあげた歌詠みである。

②	①	
し	き	しか

2 次の傍線部「し」のうち過去の助動詞「き」の活用したものはどれか、記号で答えよ。

- ① 秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。  
秋の木の葉が散っているようであった。
- ② いとかなしくしけり。  
とてもかわいがった。
- ③ そのままになむ居られにし。  
そのまま座っていらつしやうた。

③
---

【解説】

1 過去の助動詞は「き」または「けり」であるが、ここは「き」の活用形を確認する問題である。

↓ ①「しか」は直上が連用形で、直下が已然形接続の「ば」であるから、過去の助動詞「き」の已然形「しか」。「き」は直上が完了の助動詞「ぬ」の連用形(↓6助動詞入門の「ポイントC」参照)、文末なので終止形「き」。

↓ ②「し」は直上が連用形(ヤ行下二段活用)の動詞「聞こゆ」で、直下が体言であるから、過去の助動詞「き」の連体形「し」。

2 「し」の識別。ポイントAを確認する。

↓ ①強意の副助詞。「し」を取り払っても文の意味が変わらない。「しも」の形を取ることが多い。

↓ ②サ変動詞「す」の連用形。直下が連用形接続の助動詞「けり」。直上が形容詞シク活用「かなし」の連用形。(↓4形容詞の「ポイントA」参照)

↓ ③過去の助動詞「き」の連体形。文末で上に係助詞「なむ」があるので連体形。連体形の「し」は過去の助動詞「き」の連体形しかない。

3 次の例文「こそ」の結びを答えよ。

- ① 心ある人こそよけれ。  
風流を解する人がよい。
- ② 七夕まつるこそなまめかしけれ。  
七夕を祭るのは優美である。
- ③ ちこそうつくしかりけれ。  
赤ちゃんはかわいいなあ。

③	②	①
けれ	なまめかしけれ	よけれ

4 次の傍線部の文法的意味として適当なものを、後の中からそれぞれ選べ。

- ① 身はいやしなから母なむ宮なりける。  
(男は) 身分は低いが母は皇族であった。
- ② 深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり。  
山の深い所では松に降り積もった雪さえ消えていないのに、都では野辺の若菜を摘んでいるよ。
- ③ 「命長きは憂きことこそありけれ」と思しけり。  
「長生きするのはつらいことであるなあ」とお思いになった。

イ 過去    ロ 詠嘆

①	イ	②	ロ
③	イ	④	ロ

3 過去の助動詞の已然形の「けれ」なのか、形容詞や形容詞型の助動詞の已然形活用語尾の「けれ」なのかを見分ける。

↓ ①「けれ」の直上が連用形になっていない。「よけれ」で一語。形容詞「よし」の已然形。

↓ ②「けれ」の直上が連用形になっていない。「なまめかしけれ」で一語。形容詞「なまめかし」の已然形。

↓ ③「けれ」の直上が連用形。「けれ」で一語。過去の助動詞「けり」の已然形。

4 ポイントBを確認する。

↓ ①次の②・③以外は過去である。

↓ ②和歌中の「けり」は詠嘆。

↓ ③話者の感想を表しており詠嘆。

8 【練習ドリル】の解答

1 次の例文から助動詞「つ」「ぬ」を抜き出し、その活用形を答えよ。

① 水おびただしくわき上がって、ほどなく湯にぞなりにける。

水がひどく沸き上がって、すぐに湯になってしまった。

② くちなはを大井川に流してけり。

蛇を大井川に流してしまった。

③ 「はや、殺し給ひてよかし」

「はや、殺してしまいなさいよ」

④ 玉の緒よ、絶えなば絶えね。

私の命よ、絶えてしまえば絶えてしまえ。

	④	③	②	①
	ね	な	てよ	に
	命令形	未然形	命令形	連用形

2 次の例文の空欄に、助動詞「ぬ」を適当な形に活用させて入れよ。

① ぬはたまの夜は更け  らし。

夜が更けたらしい。

↓ 空欄の後に続く語をよく見て、「ぬ」の活用形を考える。

↓ ①助動詞「らし」は終止形の後につく。よって、「ぬ」の終止形を入れる。「ぬはたまの」は「夜」にかかる枕詞。枕詞は訳さない。

② 「主おはせずとも、さぶらひ  む」

「主人がいらっしやなくてさ、きつとお仕えるつもりだ」

③ 恋すてふ我が名はまだきたち  けり人知れずこそ思ひ初めしか

恋をしているという私の噂はもう立ってしまったなあ。人知れずあの人を想い始めたのだ。

④ 「まづこの院を出でおはし  」とそそのかす。

「まず、この院をお出になってください」と勧める。

③	①
に	ぬ
④	②
ね	な

3 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

① 船に乗りなむとす。

船に(きつと)乗ろうとする。

② 花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に

桜の花の色はあせてしまったなあ(私の容色もおとろえてしまったなあ。むだに降る雨を眺めて、私がむなしくこの世に生きながらえて物思いに沈んでいる間に。

①	乗ろうとする。
②	(桜)花の色はあせてしまったなあ。

【解説】

1 「つ」「ぬ」の活用を覚える。特に「て」と「に」は他の品詞と識別させる問題が出題されやすい。

↓ ①連用形+にけり」の形するとき、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

↓ ②連用形+てけり」の形するとき、「て」は完了の助動詞「つ」の連用形である。

↓ ③「つ」の活用のうち、「てよ」「は命令形のみ。

↓ ④「なば」の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形(「絶え」はヤ行下二段動詞「絶ゆ」の連用形)。

「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形が完了の「ぬ」の命令形。係助詞「そ」がないので、文末は已然形にならない。

2 空欄の後に続く語をよく見て、「ぬ」の活用形を考える。

↓ ①助動詞「らし」は終止形の後につく。よって、「ぬ」の終止形を入れる。「ぬはたまの」は「夜」にかかる枕詞。枕詞は訳さない。

↓ ②「む」は未然形の後につく。よって、「ぬ」の未然形「な」を入れる。

↓ ③「けり」は連用形の後につく。よって、「ぬ」の連用形「に」を入れる。典型的な「にけり」の形。

↓ ④空欄の下にカギ括弧( )があるから空欄部は文末。「そそのかす」とあるから命令形が考えられる。

3 助動詞の意味を考えながら注意して訳す。

↓ ①「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は意志の助動詞。

↓ ②「うつる」は「色あせる」の意。「にけり」の「に」は完了の意。「けり」は過去か詠嘆だが、ここは和歌なので詠嘆と考える。(→7助動詞(一)「けり」参照)したがって、「色あせてしまったなあ」となる。「な」は詠嘆の終助詞。



9 【練習ドリル】の解答

1 次の例文から助動詞「ず」を抜き出し、その活用形を答えよ。

- ① 京には見えぬ鳥なればみな人知らず。  
都では見えない鳥であるから人は誰も知らない。
- ② 秋にはあらねど、あはれさ止まざりけり。  
秋ではないけれども、趣深さは尽きなかった。

	②		①		
	ざり	ね	ず	ぬ	抜き出し
	連用形	已然形	終止形	連体形	活用形

2 次の例文の空欄に、助動詞「ず」を適当な形に活用させて入れよ。

- ① 船の人も見え  なりぬ。  
船に乗っている人も見えなくなりました。
- ② 隅田川なら  ば、名に負ふ都鳥も見えざりけり。  
ここは隅田川ではないので、有名な都鳥も姿が見えなかった。
- ③ 時知ら  山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪の降るらむ  
時節を知らない山は富士山であるよ。今をいつだと思つてまだらに雪が降っているのだろうか。

- ④ 「」などてかさぶらは  む「」  
「ど」してお仕えしないことがあろうか、いや、お仕えするつもりだ

④	①			
ざり	ず	②	ね	③
				ぬ

3 次の例文の傍線部を、解答例にならつて、品詞分解せよ。

- ① 齒黒め付けねば、いと世づかず。  
お歯黒をつけていないので、たいして色気もない。
- ② 飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ。  
飛ぶ鳥の声も聞こえない山奥のように、深い私の心をあの人にはわかつてほしい。

①		②	
動詞・下二段・未然形	助動詞・打消・已然形	助詞	助詞
付	け	ね	ば
動詞・四段・未然形	助動詞・打消・終止形		
世	づ	か	ず
助詞	助詞	助詞	助詞
も	聞	こ	え
助詞	動詞・下二段・未然形	助動詞・打消・連体形	助詞
		ぬ	

【解説】

1 「ず」の活用をしっかりと覚える。

↓ ①「見えぬ」の「ぬ」は「鳥」という名詞(体言)の上にあるから「ず」の連体形。「知らず」の「ず」は文末にあるから終止形。

↓ ②「あらね」の「ね」は助詞「ど」の上にあるから已然形。「やまざりけり」の「ざり」は「けり」の上にあるので連用形。

2 空欄部の下の語をよく検討して、活用形を決定する。

↓ ①「なり」は助動詞ではなく、四段活用の動詞。「すなり」の形は覚えてしまった方がよい。「すなくなる」と訳す。動詞に連なるのは連用形。動詞の上なので「ざり」ではなく「ず」を用いる。

↓ ②「ば」は未然形か已然形につくが、未然形を入れた場合の意味は「隅田川ではないならば見えなかった」となる。それでは文意が通らないので、ここは已然形。「ば」は助詞なので「ざれ」ではなく「ね」を用いる。

↓ ③「山」という名詞の上にあるから連体形。「山」は助動詞ではないので「ざる」ではなくて「ぬ」を用いる。

↓ ④「む」は未然形接続の助動詞。助動詞の上はザリ系列になるので「ざら」が答え。

3 品詞分解は、下から見上げていくのが原則。下の語を無視して形だけで決めない。

↓ ①「ば」は未然形か已然形接続の助詞。「ね」が未然形になることはないので已然形。「ね」が已然形になるのは打消の「ず」。「ず」は未然形接続だから「付け」は未然形。「付け」は「付け+ず」となり、下二段活用。

↓ 「ず」は文末にあるから、打消の終止形。「世づか」の「か」はア段音だから、四段活用。「ず」の上にあるから未然形。

↓ ②「ぬ」は「奥山」という名詞の上にあるから連体形。連体形が「ぬ」になるのは打消の「ず」。「聞こえ」は「ず」の上にあるから未然形。「聞こえ+ず」となるから下二段活用。「も」は助詞。「声」は名詞。

10 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の完了の助動詞「り」に傍線を付け、その活用形を答えよ。

- ① 立てる人どもは、装束の清らかなること、物にも似ず。  
立っている人たちは、衣服の美しいことは何にもたどえようがない。
- ② いと思ひのほかなる人の言へれば、人々あやしがる。  
実に意外な人が言ったので、人々は不思議がる。
- ③ あたら夜月の花とを同じくは心知れらむ人に見せばや  
(一人で見るとは)惜しい夜の月と花とを、同じことならば風流を解しているような人に見せたい。
- ④ やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。  
和歌は人の心を本として様々な詞となった(ものである)。
- ⑤ 今宵はただに臥し給へれ。  
今夜は何もしないで横になって下さい。

①	連体形	②	已然形	③	未然形
④	連用形	⑤	命令形		

【解説】

- 1 まず、「り」の活用した形「ら・り・る・れ」を見つける。次に、完了の助動詞「り」は直上がエ段音であることを確認する。
  - ↓ ①直下に体言「人ども」があるので連体形。
  - ↓ ②直下に接続助詞「ば」があるので已然形。
  - ↓ ③直下に助動詞「む」があるので未然形。
  - ↓ ④直下に助動詞「けり」があるので連用形。「ける」の「る」は直上がエ段音だが、助動詞「けり」の一部である。
  - ↓ ⑤「れ」の形は已然形か命令形のどちらかだが、文末にある場合は上に「そ」がなければ已然形にならない。

2 次の例文の空欄に、「り」か「たり」の適する方をそれぞれ入れよ。

- ① つれづれなれば、物語をせ 。  
退屈だったので、世間話をした。
- ② 飛鳥川、淵瀬変はらず流れ 。  
飛鳥川は、深い所と浅い所が変わらず流れている。
- ③ 木がいたづらに立て 。  
木が無駄に立っている。
- ④ 木をいたづらに立て 。  
木を無駄に立ててある。

①	り	②	たり	③	り
④	たり				

3 次の歌の傍線部を助動詞に注意して訳せ。

白波に秋の木の葉の浮かべるを海人の流せる舟かとぞみる  
 白い波に秋の木の葉が浮かんでいるのを(まるで)漁師の流した船かと(思っ)てる。

a	浮かんでいる(の・様子)
b	流した

2 「り」はサ変動詞の未然形か四段動詞の已然形(命令形)に接続する。「たり」は連用形に接続する。

- ↓ ①「せ」はサ変動詞の未然形。
- ↓ ②「流れ」は下二段動詞の連用形。
- ↓ ③④「立て」は現代語で言うところ「(〜が)立つ」「(自動詞)と」「(〜を)立てる」(他動詞)の二つがある。
- ③は「木が」とあるので前者。「ず」をつけると「立たず」となり四段活用。「立て」は四段活用の動詞「立つ」の已然形(命令形)。
- ④は「木を」とあるので後者。「ず」をつけると「立てず」となり下二段活用。「立て」は下二段活用の動詞「立つ」の連用形。

3 ポイントBを確認する。

↓ どちらの「る」も完了の助動詞「り」の連体形であるが、前者は今「木の葉が浮かんでいる」の意で存続用法、後者はそれを既に「漁師が流した船かと思っ)てる」の意で完了用法。

11 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の助動詞「る」「らる」に傍線を付け、その活用形を答えよ。

- ① 泊まる方は思ひかけられず。  
泊ま(つてくれ)ることは期待できない。
- ② 家居にこそ、ことさまはおしはからるれ。  
住まいで、(家の主の)様子は自然と推察される。
- ③ 舅にほめらるる婿。  
舅にほめられる婿。
- ④ 僧たち、祈りころみられよ。  
お坊さん達、祈ってみて下さい。

①	未然形	②	已然形	③	連体形
④	命令形				

2 次の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、後の選択肢の中からそれぞれ選べ。

- ① あまりに水が速うて、馬は押し流されけり。  
あまりに水(の流れ)が速くて、馬は押し流された。
- ② 殿、かくのみなむ仰せられし。  
殿は、ただこのようにおっしゃった。
- ③ 女は、ものもおほえられで、嘆きけり。  
女は、何も考えることができないで、嘆いていた。

- ④ 折々のこと思ひいでて、よよと泣かれ給ふ。  
様々な折のことを思い出して、ついおいおいとお泣きになる。
- イ 自発    ロ 可能    ハ 受身    ニ 尊敬

①	ハ	②	ニ	③	ロ	④	イ
---	---	---	---	---	---	---	---

3 次の例文の傍線部を口語訳せよ。

- ① 大将、東の門より参られけり。  
大将は、東の門を通して参上なされた。
- ② 今日京都のみぞ思ひやらるる。  
今日は都のことばかり自然と思い出される。
- ③ 涙のこぼるるに、ものも言はれざりけり。  
涙がこぼれるので、何も言うことができなかった。

①	参上なされた。
②	自然と(=つい)思い出される(=思い出す)。
③	何も言うことができなかった。

【解説】

1 「る」「らる」は、ともに未然形接続の助動詞であるが、四段・ナ変・ラ変動詞の後には「る」が、その他の後には「らる」が接続する。

- ↓ ①「思ひかけ」はカ行下二段動詞「思ひかく」の未然形。よって「らる」が使われている。直下が未然形接続の助動詞「ず」なので未然形。
- ↓ ②「おしはから」はラ行四段動詞「おしはかる」の未然形。よって「る」が使われている。文末で、上に「こそ」があるので已然形。
- ↓ ③「ほめ」はマ行下二段動詞「ほむ」の未然形。よって「らる」がつかわれている。直下に体言「婿」があるので連体形。
- ↓ ④「ころみ」はマ行上二段動詞「ころみる」の未然形。よって「らる」が使われている。文末で、形を見ると命令形。文意からも命令形である。

2 ポイントBを確認する。

- ↓ ①「馬は」の後に「水に」を補える。また、文意から自発・可能・尊敬は不可。
- ↓ ②「仰せらる」の「らる」は絶対に尊敬である。
- ↓ ③直下の「で」は「ないで」と訳す打消の接続助詞。

↓ ④「泣く」は心情語である。「れ給ふ」「られ給ふ」の「れ」「られ」は決して尊敬にはならないので注意。

3 「る」「らる」の活用したものを見つけ、文法的意味を考える。受身以外は「くれる」「くられる」で訳さない。

- ↓ ①「れ」は尊敬の助動詞「る」の連用形。(自発・可能・受身にならず、主語が貴人である「大将」)
- ↓ ②「るる」は自発の助動詞「る」の連体形。「思ひやる」は心情語である
- ↓ ③「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ざり」が打消の助動詞

12 「練習ドリル」の解答

1 次の例文の助動詞「す」「さす」「しむ」に傍線を付け、その活用形を答えよ。

- ① 御格子あげさせて、御簾を高く巻きあげたり。  
格子を上げさせて、簾を高く巻き上げた。
- ② 食はすれば食ひ、食はせねば食はであり。(二つ)  
食わせると食ひ、食わせないと食わないでいる。
- ③ 愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。  
愚かな人が目を喜ばせる楽しみは、またつまらない(ものだ)。
- ④ 柵を切り落とさせ給へ。  
柵を切り落として下さい。

①	連用形	③	連体形
②	已然形	④	連用形
	未然形		

2 次の例文の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、後の選択肢の中からそれぞれ選べ。

- ① 御年二十にぞならせおはしましける。  
お年は三十歳になっていらつしやうた。
- ② 殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらはせ給ふ。  
殿(藤原道長)は歩き回りなきて、隨身をお呼びになって遣り水をきれいにさせさる。

③ 燕の巢に手をさし入れさせて探りけり。

燕の巢に手を差し入れさせて探った。

イ 尊敬    ロ 使役

a
イ
b
イ
c
ロ
d
ロ

3 次の傍線部を口語訳せよ。

- ① 上も聞こし召し、めでさせ給ふ。  
帝もお聞きになり、お喜びになる。
- ② 供の者に手綱を持たせ給ふ。  
供の者に手綱を持たせなさる。

①	お誉めになる(誉めなさる)。
②	持たせなさる。

【解説】

1 「す」「さす」は、ともに未然形接続の助動詞であるが、四段・ナ変・ラ変動詞の後には「す」が、その他の後には「さす」が接続する。

- ↓ ①「あげ」はガ行下一段動詞「あく」の未然形。よって「さす」が使われている。連用形接続の助動詞「て」の上で連用形。
- ↓ ②二つの「食は」はハ行四段動詞「食ふ」の未然形。よって「す」が使われている。「すれ」は已然形接続の助動詞「ば」の上で已然形。「せ」は未然形接続の助動詞「ず」の已然形「ね」の上で未然形。
- ↓ ③「よろこば」はバ行四段動詞「よろこぶ」の未然形。直下が体言「楽しみ」で連体形。
- ↓ ④「落とさ」はサ行四段動詞「落とす」の未然形。よって「す」が使われている。直下が用言で連用形。

2 「す」「さす」は、まず直下の語に注目する。

- ↓ ①直下に尊敬語「おはします」がある。また、文意から使役は無理(歳は取るもので取らせるものではない)。
- ↓ ②b・cともに下に尊敬語「給ふ」がある。bの上の「ありか」(終止形は「ありく」で意味は「歩き回る」という行為は貴人である「殿」がして行為を自分でするとは考えにくい。御隨身を「召し」たのはそれをさせるためであって、cは使役となる)。

↓ ③直下に尊敬語がないので使役である。

3 「す」「さす」の活用したものを見つけ、文法的意味を考える。

- ↓ ①「させ」が尊敬の助動詞「さす」の連用形。「させ給ふ」で「なさる」「おしになる」と訳せばよい。
- ↓ ②「せ給ふ」の形ではあるが、「供の者に」と何かをさせる相手を書いてあるので「せ」が使役の助動詞「す」の連用形。

13 【練習ドリル】の解答

1 次の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

① 「この度はかならず逢はむ」と、女の心にも思ひをり。  
「今度は必ず会おう」と、女の心の中でも思っている。

② 「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」  
「清少納言よ、香炉峰の雪はどのようであらうか」

③ 「かのもと国より、迎へに人々まうで来むず」  
「あのもと国から、迎へに人々が参上して来るだろう」

④ 子といふものなくてありなむ。  
子どもというものはいないほうがよい。

⑤ 一生の恥、これに過ぐるはあらじ。  
一生の恥で、これにまさるものはありほしくないだろう。

⑥ 思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。  
（いとしく）思うような子供をもし法師にしたら、それは、心痛むことである。

⑦ 「われはしかじかのことありしかば、そこに堂を建てむずるぞ」  
「私はこれこれのことがあったので、そこにお堂を建てつもりだ」

- イ 推量                      ロ 意志                      ハ 假定・婉曲
- ニ 適当・勧誘              ホ 打消推量              ヘ 打消意志

⑤	①
ホ	ロ
⑥	②
ハ	イ
⑦	③
ロ	イ
	④
	ニ

【解説】

1 「む」と「むず」は四つの意味、「じ」は二つの意味を持つ。《ポイントB》の意味の見分け方に従って、区別する。しかし、短い例文では意味を決めがたいものもあり、入試によく出される例文は覚えておくというのが、現実的対処法といえる。

↓ ① 「」の部分に女が思っていることで、「逢はむ」の主語は一人称(女)私)となるので、「む」は意志(～しよう)と考える。

↓ ② 「む」はまず推量で訳してみる。それで例文の訳がうまくいけば、それでよい。

↓ ③ 「むず」もまず推量とを考えてみる。主語は三人称(人々)で、「まうで来むず」は「参上して来るだろう」と訳すとぴったり当てはまる。

↓ ④ この例文は、会話文ではないが、随筆・評論系の文章においては地の文にも適当(勧誘)用法の「む」が現れることがある。また、「こそめ」・「なむ」・「てむ」の形が、適当・勧誘の代表パターンである。この例文は適当の「む」の典型的な例文でもある。

↓ ⑤ 「じ」は打消意志か打消推量しかない。主語は「一生の恥」という三人称であるし、「あらじ」は「ありほしくないだろう」の訳がこの例文に合う。

↓ ⑥ 「む」の直下に体言か助詞があったら、「む」は假定(～としたら)・婉曲(～ような)と考える。これもよく出される例文である。

↓ ⑦ 「われ」が主語、つまり「建てむずる」の主語は一人称であるから、「むずる」は意志(～しよう)と考える。

2 「む」は1と同じように《ポイントB》の意味の見分け方によって判断する。

↓ ① 会話文で尊敬語(給ふ)が使われているので主語は二人称(あなた)だと考えられる。さらに適当・勧誘用法の代表パターン「こそめ」・「なむ」・「てむ」の形であることも見極めのポイントになる。ただし必ず訳して確認すること。

↓ ② 「女の盛りになりなば」とは、「娘盛りになったならば」の意。假定条件(もし～ならば)の文である。となると、下には「～だろう」と続くのが自然なつながりで、「む」は推量である。「長くしよう」の意であれば「なりなむ」ではなく、「しなむ」となるはずである。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形の強意用法で「きつと・必ず」などと訳す。

2 次の傍線部の現代語訳として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

① 「なかかくは急ぎ給ふ。花を見てこそ帰り給はめ」

「どうしてこのようにお急ぎになるのか。花を見てお帰りになるほうがよい(お帰りになりませんか)」

イ お帰りになるだろう

ロ 帰っただろう

ハ お帰りになりませんか

ニ 帰ることにしよう

② 女の盛りになりなば、髪もいみじく長くなりなむ。

娘盛りになったならば、髪もきつと大変長くなるだろう。

イ きつとなるだろう

ロ なっただろう

ハ おそらくなるほうがよい

ニ 必ずなるようにしよう

①
ハ
②
イ

14 「練習ドリル」の解答

1 次の例文の傍線部を助動詞に注意して口語訳せよ。

① 昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方に行きて、

② 憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ私、憶良はもう退出しましょう。今ごろは(家で)子供が泣いているでしょう。その母も(私の帰りを)待っているでしょう。

③ 死にけむこそあはれなれ。死んだとかいうのはしみじみと悲しいことである。

①	都が暮らしづらかったのだろうか、
②	今ごろは(家で)子供が泣いているだろう。
③	死んだとかいうのは

2 次の例文の空欄に「らむ」「けむ」を適当な形に活用させて入れよ。

① 色も香も昔の濃きに匂へども植ゑ  人の影ぞ恋しき

(この梅の花は)色も香りも以前と同じく濃く美しく咲き匂っているが、植えた人の影が恋しく思われる。

② 吉野川岸のやまぶき咲きにけり峰の桜は散りはてぬ

吉野川の岸の山吹が咲き始めたなあ。峰の桜は今ごろは散ってしまったているだろう。

①	けむ
②	らむ

3 次の例文の傍線部「らむ」「けむ」について、文法的説明の正しいものを後の選択肢からそれぞれ一つ選べ。

① 折にふれば、何かはあはれならざらむ。

よい時機にあたると、何事も興趣がないことがあるうか。

② 何事にかあらむ、ことごとくのしりて、

何事であろうか、おおげさに騒ぎ立てながら、

③ 生けらむほどは武に誇るべからず。

生きている間は武勇を誇ってはならない。

④ かくて都にあるならば、また憂き目を見むずらむ。

こうして都にいるならば、再びつらい目に遭うだろう。

- イ 助動詞
- ロ 助動詞の一部+助動詞
- ハ 助動詞+助動詞
- ニ 助動詞の一部+助動詞

①	ロ
②	ニ
③	ハ
④	イ

【解説】

1 「らむ」は現在推量、「けむ」は過去推量が基本だが、「らむ」には現在の伝聞・婉曲、「けむ」には過去の伝聞・婉曲の用法もある。

↓ ①「京や」の「や」は疑問の係助詞。「住み憂かり」は「住み憂し」の連用形で、暮らすのがつらいの意。「けむ」は過去推量である。

↓ ②「らむ」は現在推量で、「今ごろは」しているだろうと訳せばよい。目の前に見えない物、つまり家での子供の様子を推量している。

↓ ③「死にけむ」の「けむ」の直下に係助詞「こそ」があるので、「けむ」は過去の伝聞・婉曲(「たとかいう」たような)である。「けむ」が過去の伝聞・婉曲になるのは、「む」が仮定・婉曲になるときと同じで、直下に体言か助詞があるときである。

2 「らむ」は終止形接続(ラ変型活用語には連体形接続)、「けむ」は連用形接続の助動詞であることを踏まえて、どちらを入れるかを決める。

↓ ①空欄の上にはワ行下二段活用助動詞「植う」の連用形「植ゑ」があるので、「けむ」を入れる。空欄の下に「人」という体言があるので、「けむ」は連体形の「けむ」にする。

↓ ②空欄の上には完了の助動詞「ぬ」の終止形があるので、「らむ」を入れる。「ぬ」を打消の助動詞「ず」の連体形と考えると、「けむ」も「らむ」も当てはまらない。係り結びも何もないので、「らむ」は終止形でよい。

3 「らむ」が一語の助動詞であれば、「らむ」の上は終止形(ラ変型活用語な連体形)である。

↓ ①「あはれならざらむ」は、形動「あはれなり」の未然形「あはれなら」+打消の助動詞「ず」の未然形「ざら」+推量の助動詞「む」である。

↓ ②「あらむ」はラ変助動詞「あり」の未然形「あら」+推量の助動詞「む」である。

↓ ③「生けらむ」は、四段助動詞「生く」の已然形(命令形)「生け」+完了・存続の助動詞「り」の未然形「ら」+婉曲の助動詞「む」である。

↓ ④「見むずらむ」は、マ行上一段助動詞「見る」の未然形の「見」+推量の助動詞「むず」の終止形+現在推量の助動詞「らむ」の終止形である。「むずらむ」は、二語合わせて「くだろう」と訳す。

15 【練習ドリル】の解答

1 次の例文の空欄に「まじ」を適当な形に活用させて入れよ。

① 冬枯れの景色こそ秋にはをさをさ劣る まじけれ。

冬枯れの景色は秋（の景色）に比べてほとんど劣ることはないだろう。

② この女見では世にある まじき 心地しけり。

この女と結婚しないでは生きていくことはできない気持ちがあった。

2 次の傍線部の口語訳として最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つ選べ。

① 惟光の朝臣の宿る所にまかりていそぎ参るべきよし言へ。

惟光の朝臣が泊っている所に行つて、急いで参上せよということを書え。

イ 急いで参上しよう

ロ 急いで参上せよ

ハ 急いで参上するだろう

② 「消息をつきづきしう言ひつべからむ者ひとり」と召せば、

「訪問の挨拶をその場にふさわしく言うことができそうな者を一人」とお呼びになると、

イ 言つたであろう人

ロ 言おうとする人

ハ 言うことができそうな人

ニ 言つてしまった人

③ 咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。

今にも花の咲きそうな梢や、花の散りしおれている庭などは見所が多い。

イ 今にも花の咲きそうな梢

ロ 花が咲いたにちがいない梢

ハ 花が咲いてほしい梢

ニ 今まさに花の咲いている梢

④ 御文にも「おろかにもてなし給ふまじ」とかへすがへすいませぬまへり。

お手紙にも「おろそかに扱つてはいけない」と繰り返しいきまなされた。

イ 適当に扱いなさい

ロ いいかげんに扱わないだろう

ハ 愚かな扱いはできない

ニ おろそかに扱つてはいけない

⑤ 人のたはやすく通ふまじからむ所に跡を絶えて籠もり居なむ。

人がたやすくは通えない所に消息を絶つてもつていよう。

イ たやすく通つていける所

ロ 簡単に通つていくはずの所

ハ たやすくは通えない所

ニ 簡単には通わなかつた所

④	①
ニ	ロ
⑤	②
ハ	ハ
	③
	イ

【解説】

1 「まじ」は、「べし」と同じく形容詞型活用をする。

↓ ① 例文中に係助詞「こそ」があるので、係り結びで、文末は已然形にしなければならぬ。「まじ」の已然形は「まじけれ」である。

↓ ② 空欄の下に「心地」という体言があるので、空欄には「まじ」の連体形を入れる。連体形は「まじき」と「まじかる」があるが、「まじかる」は下に助動詞がつくとき用いられるものであるから、「まじき」が答となる。

2 「べし」と「まじ」にはそれぞれ六つもの意味がある。「べし」をどう訳すと前後にうまく意味がつかぬかを一つ一つ考えていく。

↓ ① 傍線部の「べき」は命令（～せよ）である。「べきよし」というときの「べし」はたいいてい命令を表す。

↓ ② 傍線部を品詞分解すると、「言ひつ+べから+む」となる。「つ」は強意（きつ）と訳す（の助動詞）（↓8 助動詞（二）へポイントB参照）。「む」は下に体言の「者」があるので婉曲（～ような）の助動詞である（↓13 助動詞（七）へポイントB参照）。「つ」は強意だから、完了（～た）で訳してあるイ・ニはダメ。人を「召す」のは、「消息（訪問の挨拶）をつきづきしう（その場にふさわしく）」でできる者を求めるためである。よつて「べから」は可能。

↓ ③ 傍線部の「ぬべき」は、強意の助動詞「ぬ」+推量の助動詞「べき」で、「きつとくだろう」と訳す。だから、直訳すると「きつと咲くだろう」の梢で、うまく訳すと「今にも花の咲きそうな梢」となる。

↓ ④ 傍線部の「まじ」は禁止（～するな）である。なぜなら、文末に「いませぬまへり」とあるので、「～してはいけない」といさめるというのが、最も自然な意味のつながりとなる。「おろかに」は、「いいかげんに」とか「おろそかに」と訳すのが正しい。

↓ ⑤ 傍線部の「通ふまじからむ」を品詞分解すると、「通ふ+まじから+む」である。「まじから」の六つの意味を考えてみても、イ、ロ、ニの訳にはなりえない。ハは「まじから」を不可能にとつた訳で、前後にも意味がうまくつながらぬ。「む」は婉曲（～ような）の助動詞である。

16 【練習ドリル】の解答

1 次の三つの例文の傍線部「なり」について説明した文の空欄に入れるのに適当な語を、後の選択肢からそれぞれ選べ。

① 比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。  
比叡山の麓であるので、雪がとても深い。

② 人をして呼ばすれど、答へきなり。  
人に命じて呼ばせるけれども、答えないようだ。

③ 手をおびただしくはたはたと打つなる。  
手を何度も騒がしくはちばちと打つのが聞こえる。

例文①の「なれ」はAに接続しているので、Bである。

例文②の「なり」の上の「や」は、もとの形はCで、その撥音便無表記形であるから、この場合「なり」はDである。例文③の「なる」の上の「打つ」は四段活用動詞で、EとFとが同形なので、接続からは「なる」は判定できないが、「はたはたと打つ」という音を表す語句があるので、「なり」はGである。

イ 断定の助動詞    ロ 推定の助動詞    ハ 未然形    ニ 連用形  
ホ 終止形            ヘ 連体形            ト 体言            チ ざり  
リ ざる

E	A
ホ	ト
F	B
へ	イ
G	C
口	リ
	D
	口

2 次の例文の傍線部「に」を完了の助動詞と断定の助動詞とに分類せよ。

① この川飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに変はらざりけり。

この川は飛鳥川でないので、深い所と浅い所は全く変わらなかった。

② 過ぎにし方の恋しさのみぞせんかたなき。

過ぎてしまったことがただ恋しいのはどうしようもない。

③ 河内へも行かずなりにけり。

河内へも行かなくなりました。

④ 世にありがたきものには侍りけり。

この世にめつたにないものではありません。

⑤ 我を思ふ人と思はぬ報いにやわが思ふ人の我を思はぬ

私のことを想う人(私が)想わない報いであるうか、私が想う人が私を想わないのは。

完了	断定
②	①
③	④
	⑤

【解説】

1 助動詞「なり」は二種類あり、まず接続で区別すること、伝聞推定の「なり」の上は撥音便化しやすいことなどを踏まえて解く。

↓ ① 体言に接続しているので「なり」は、断定の助動詞である。「ふもとなれば」は「麓であるから」の意になる。

↓ ② 「なり」の上の「や」は、打消の助動詞「ず」の連体形「ざる」が撥音便化して「ざん」となり、「ざん」の「ん」が表記されていない形である。「あ(ん)なり」の「なり」は、「あ(ん)なり」や「な(ん)なり」の「なり」と同じく、伝聞推定の助動詞である。よって、「答へきなり」は「答えないようだ」という訳になる。

↓ ③ 四段活用の動詞は終止形と連体形が同じ形である。この例文でも「打つ」を終止形と考えれば「なる」は伝聞推定、「打つ」を連体形と考えれば「なる」は断定となる。しかしここで伝聞推定の「なり」は音や声による聴覚推定であるという本来の働きを考えると、「はたはたと打つ」というのは音を表しているので、「なる」は伝聞推定と判断できる。「打つなる」は「打つのが聞こえる」と訳す。例えば、「鳥鳴くなり」の「なり」も伝聞推定である。

2 「に」の識別で最も重要なのは、完了の助動詞「ぬ」の連用形と断定の助動詞「なり」の連用形である。

↓ ① 「に」の下には「あり」の未然形「あら」があり、「にあら」は「に」である」と訳せるので、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形と決まる。

↓ ② 「に」の下には過去の助動詞「き」の連体形である「し」が接続しているので、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形である。「しにき」「しにけり」「しにたり」「しにけむ」の形をとる「に」は、完了の助動詞と覚えておくことよ。 (→ 8 助動詞(一)「に」「ぬ」参照)

↓ ③ 「に」の下には過去の助動詞「けり」が接続しているので、完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

↓ ④ 「に」の下には助詞「は」を「は」で「侍り」の連用形「侍り」があり、「であります」と訳せるので、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形と決まる。

↓ ⑤ まず「にや」の下に「あらむ」が省略されていることに気づくことが必要である。(→ 22 助動詞(四)係助詞参照) それに気づけば、「に」の下に、助詞「や」を「は」で「あり」の未然形「あら」があり、「は」であるうかと訳せるので、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形である。



17 【練習ドリル】の解答

1 次の傍線部の音便形をもとの形に直せ。

① 秋の夜は露こそことに寒からし草むらことに虫のわぶれば  
秋の夜は露がことのほか冷たいらしい。(露の置く)草むらことに虫がつかうように鳴いているので。

② 兵衛太郎、兵衛次郎共に討ち死にしてんげり。  
兵衛太郎、兵衛次郎は共に討ち死にってしまった。

③ ひときは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。  
一段と心の浮き立つものは、春の様子であるようだ。

④ いとど忍びがたく思すべかめり。  
なおいっそう(悲しみを)こらえがたくお思いになつていようだ。

⑤ 車より落ちぬべうまろび給へば、  
牛車から落ちてしまいうなほど転げまわりなざるので、

①	寒がるらし	②	してけり
③	あるめれ	④	思すべかめり
⑤	落ちぬべく		

【解説】

1 音便形はイ音便、ウ音便、撥音便など数種類あるが、実例をいくつか見て慣れておくというのが最も賢明な対処法である。

↓ ①助動詞「らし」が形容詞に接続するときは、カリ系列の連体形に接続する。よって、「寒し」に「らし」が接続すると、「寒がるらし」となる。これが撥音便で「寒かんらし」となり、「ん」を表記していない形が「寒からし」である。

↓ ②「てんげり」は、「てけり」の変化したもの。軍記物語によく出てくる「てんげり」の形は覚えてしまふとよい。「してんげり」の「し」はサ変動詞「す」の連用形である。

↓ ③助動詞「めり」はラ変型活用語に接続するときは、連体形に接続する。よって、ラ変動詞「あり」に「めり」が接続すると、「あるめり」となる。これが撥音便で「あんめり」となり、「ん」を表記していない形が「あめり」である。「めれ」は「めり」の已然形である。

↓ ④「べかめり」は、もとの形は「べかるめり」「べかる」は「べし」の連体形で、これが撥音便で「べかんめり」となり、「ん」を表記していない形が「べかめり」である。

↓ ⑤「べう」は「べく」(助動詞「べし」の連用形)のウ音便形。「べう」の上の「ぬ」は強意の助動詞である。

2

次の例文について、後の二つの間に答えよ。

命こそかなひ難かべいものなめれ。

命は思い通りにならないはずのものであるようだ。

(1) 例文には音便形が三ヶ所ある。これをすべてもとの形に直した文にせよ。

命こそかなひ難かるべきものなるめれ。

(2) 例文の現代語訳として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ 命あってこそ難しい願いもかなうことになるだろう。

ロ 命はあっても難しい願いはかなうことはないだろう。

ハ 命は時には思い通りになるものでもあるようだ。

ニ 命は思い通りになりにくいはずのものであるようだ。

二

2

形容詞の音便と助動詞の音便の複合問題である。

↓ (1) 助動詞の音便を先に押さえると、「かなひ難かべい」の「べい」は「べき」のイ音便形であり、「なめれ」は「なるめれ」の撥音便「なんめれ」の「ん」を表記しない形である。更に形容詞の音便があり、「かなひ難か」は「かなひ難かる」(「かなひ難し」の連体形)の撥音便「かなひ難かん」の「ん」を表記していない形である。

↓ (2) 上から一語一語押さえていくと、「命」の下の「こそ」は強意の助詞、「かなひ難し」は「望みや思いがかなうのが難しい」の意、「べき」は当然(はず)、「なる」は断定(である)、「めれ」は推定(だろう)である。よって、直訳は「命は思い通りになるのが難しいはずのものであるようだ」となる。

18 「練習ドリル」の解答

1 次の例文の傍線部は、「反実仮想」か、「ためらいを含む意志」か、二つに分類し、番号で答えよ。

① 時ならず降る雪かとぞながめまし花橋の薫らざりせば  
時節はずれに降る雪かと(思つて)ながめたことだろうに。(散りゆく)花橋が香らなかつたならば。

② なほこれより深き山を求めてや跡絶えなまし。  
やはりここから深い山を探して行方知れなくなつてしまおうかしら。

③ 昼ならましかば、のぞきて見奉りてまし。  
昼であつたならば、のぞいて見申しあげたことだろうに。

④ いかにせまし。忍びてや迎へ奉りてまし。  
どうしようか。人目を避けてお迎え申しあげてしまおうか。

反実仮想	①	③
ためらいを含む意志	②	④

2 次の傍線部の後に補う言葉として、最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選べ。

大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、「この木なからましかば」とおぼえしか。

大きな蜜柑あまみかんの木で、枝もたわわに実がなっている木が、その周囲を嚴重に囲つてあるのは、少し興覚めで、「この木がなかつたならば(よかつただろうに)」と思われた。

- イ よけれ
- ロ よからまし
- ハ よかりき
- ニ よからず

□

3 次の例文の空欄に「まほし」を適当に活用させて書き入れよ。

① 愛敬ありて、言葉多からぬこそ、飽かず向かは **まほしけれ**。

かわいげがあつて、言葉数が多くない人は、飽きることなく対面していたい。

② いかなる人なりけん、たづね聞か **まほし**。

どういう人であつたのだろう、捜し求めて聞きたいものだ。

③ 行か **まほしく** 思ふに、兄上なる人抱きて率て行きたり。

(私が)行きたいと思つていると、兄が(私を)抱いて連れて行った。

④ 少しの事にも先達はあら **まほしき** ことなり。

些細なちさいことについても、案内役はあつてほしいものである。

【解説】

1 「まし」が反実仮想のときは仮定条件の文の構造をとる。ためらいの意志を表すときは疑問の副詞や疑問の助詞を伴う。

↓ ①「せば、まほし」の倒置表現であり、「まし」は反実仮想を表す。

↓ ②上に「や」という疑問の係助詞があり、反実仮想の構文をとっていないので、「まし」はためらいを含む意志を表す。

↓ ③「ましかば、まほし」という典型的な反実仮想の構文をとっているため、「まし」は反実仮想である。

↓ ④上に「いかに」という疑問の副詞があり、反実仮想の構文をとっていないので、「まし」はためらいを含む意志を表す。

2 反実仮想表現の下半分を補う。

↓ 答えは「ましかば、まほし」という反実仮想の典型的な形を知つていれば決まる。

3 係り結びや下に付く語に注意して「まほし」を活用させる。

↓ ①文中に「こそ」があるので、係り結びで「まほし」の已然形「まほしけれ」となる。

↓ ②文中に係助詞もないので、普通に文末は終止形で終わればよい。

↓ ③空欄の下に動詞「思ふ」があるので、連用形にしなければならぬ(↓ 1 古典文法事始めポイントB参照)。連用形は「まほしく」と「まほしかり」があるが、「まほしかり」は下に助動詞がつくときのみ用いる。

↓ ④空欄の下に体言の「こと」があるので、「まほし」の連体形が入る。連体形は「まほしき」と「まほしかる」があるが、下に助動詞以外がくるときは、「まほしき」を用いる。